

たたかう少女4

キヤット・フアイト

「アユミ」

冷たい声に名前を呼ばれて、のろのろと立ち上がった。

「出番だよ。さっさとしな」

これから闘いの場に向かう者に対する気遣いなど、微塵も含まれていない乾いた声。

「……はい」

応える自分の声も、砂漠の砂のように乾ききっていた。

顔を上げると、案内人である見慣れた中年女の顔が目に入る。薄暗いランプの灯りのせいもあるのかもしれないが、濁った目をしている。だけどそれは、自分も、ここにうずくまっている他の闘奴たちも同じなのだろう。

足を踏み出すと、両足首をつないでいる太い鎖ががちやりと音を立てた。

手首ももう少し細い鎖でつながれていて、ずっとしりと重い。

ばかばかしい演出……表情には出さずに、心の中でつぶやいた。

こんなことをせずとも、闘奴は逃げ出したりはしない。少なくとも、まともな思考能力があるのであれば。

ほとんどの闘奴は、普段は鎖も足枷もつけられてはいない。アユミのように大人しくて従順な者であればなおさらだ。

こんな、見た目だけの鎖など必要ない。闘奴を縛る目に見えない鎖は、もっと太く、重く、そして残酷なのだ。

魔法、という名の見えない鎖。

魔術師と呼ばれるほんの一握りの者たち以外、断ち切ることのできない鎖。

一度だけ、見たことがある 無理やり見せられた、というのが正しい。逃亡を企てた闘奴の処刑を。

二度と思い出したくない光景だった。一瞬のうちに、紅い肉片と化す人間の姿など。

あれを見れば、逃亡しようなどと考えるのは自

殺志願者だけになる。それに自殺するのであれば、もっと綺麗な死に方はいくらかもあるのだ。

この鎖はあくまでも、観客向けの演出だった。試合の前、控室に連れてこられた時に付けられる鎖でつながれた可憐な少女　そんなシチュエーションが、観客には受けるのだそうだ。

(……ふう)
前を歩く案内人に聞こえないように、溜め息をつく。

いつものことながら、心が重い。
この場から逃げ出してしまいたい。

重い鎖を引きずりながら、闘技場へ続く暗い通路をゆっくりと歩いていく。その一歩ごとに、足取りはさらに重くなってゆく。

裸足の足に、冷たく固い石の感触が伝わってくる。微かな足音は、鎖の音にかき消されていた。

「……今日の相手は、どんな方ですか？」
案内人の背中に向かって訊く。前を歩く女は振り返ることもなく、事務的な素っ気ない声が返ってきた。

「ランドン闘技団所属のマイラ……あまり聞かない名だね」

「そう……ですか」

アユミも聞いたことのない名だった。強い闘奴や人気のある闘奴であれば、その名は嫌でも耳に入ってくる。まったく聞き覚えのない名前ということは、人気も実力も大したことがないのか、あるいはまだ評価の定まっていない新人だろうか。いずれにしても、相手に対する予備知識がまったくないというのは不安なことだった。

「怖いのかい？」

女が訊く。アユミは応えなかった。

応えるまでもない。当たり前のことだ。

闘うのは怖い。

脚が震えているのがわかる。

控室を出る前に水を口に含んだはずなのに、喉がからからだった。

怖い。

ここから逃げ出したい。

だけど、逃げることはできない。

自分は闘奴なのだ。

闘技場で闘うことだけが存在意義。その立場から逃げ出す方法は「死」だけだ。

生きていたければ、闘い続けるしかない。

闘って、勝つしかない。

他の選択肢は存在しない。

それが、闘奴だった。

「あなたの対戦相手、先刻ちらつと見かけたけどね。体格がよくて、力だけは結構ありそうだったよ。でも、あんまり素速そうじゃなかったね」

あまりにも不安げな表情をしているので不憫に思ったのか、女はそう付け加える。アユミは無言で小さくうなずいた。

相手の方が大きくて、力も強い。

あまり役に立つアドバイスとも思えなかった。

それはいつものことだ。相手が大きいのではない。アユミの方が、いくら女とはいえ闘奴としては小さすぎるのだ。

闘いの場ではひどく頼りないこの華奢な身体が、しかし彼女のたった一つの財産であり武器でも

あった。小柄で華奢なアユミが勝つからこそ、観客は盛りあがる。だから、短い戦歴の割には人気がある。

人気があるのはいいことだ。

意識の片隅でそう考える。半ば、諦めに似た思いではあるが。

闘奴よりも惨めな身分があるとしたら、それは「人気のない闘奴」だろう。人気と実力があつて、かつ主人にいくらかの良心があれば、奴隷としてはかなりましな生活を送ることもできるし、十分な実績を残して引退した後は、自由の身になることもできるという。それだけが、唯一の希望だった。

「あなたなら勝てるでしょ。頑張んなさい」

女がからかうような笑みを浮かべる。一応は励ましているつもりなのかもしれない。

アユミも微笑もうとしたが、口の端が不器用に引きつっただけに終わった。闘いの前に、笑うことなんてできなかった。

突然、視界が明るくなる。

歓声が響き渡る。

直径が十数メートルの、円形の広場。固い土の上に、薄く砂が敷かれている。

そこが闘いの場だった。

周囲には、段差をつけた観客席が設けられている。ここに立つと、いつも大きなすり鉢の底にいるような気になった。

観客席に、空席はほとんど見当たらない。西の空が朱く染まっている。そろそろ混んでくる頃だろう。もっと早い、新人の試合ばかりが組まれる時間帯だと、それなりに空席もあるのだが。

闘技は、この国で一番の娯楽だった。希に、人間と猛獣を闘わせる異色の試合もあるらしいが、人間同士の格闘の方が人気がある。特に、ピキニの水着にも似た露出の多い衣装で闘う女闘奴の試合となればなおさらだった。

闘技は他の国でも広く行われているが、女闘奴の試合を常時開催しているのはこの闘技場だけだと聞いたことがある。しかしアユミはもちろん、他の国など行ったことがない。

ゆっくりと、観客席を見渡した。ずいぶん盛り上がっているようだ。前の試合は熱戦だったのだろうか。

いったい、どちらがいいのだろう。ちらりと、そんなことを考えた。

闘奴の試合は、所詮「見せ物」だ。それなのにろくに見る者もないところで闘う虚しさ、これだけ大勢の前でさらし者になる惨めさと。

小さく溜息をつく。

いずれにしても救いのない話だが、ここでそのことを嘆いていても仕方がない。

いま与えられている選択肢は、目の前の相手を倒すか、惨めに負けるかの二つしかないのだ。

(だつたら……)

負けるよりは、勝つ方がいい。欲を言えば、あまり痛い思いをせずに楽に勝てればいい。叶う可能性の低い願いではあるが。

対戦相手に目を向ける。

背が高い。百七十センチは超えているだろう。アユミの身長は相手の肩を少し超えるくらいしか

ない。

がっしりした体格で、全体的に骨太な印象だ。

体力的にはアユミよりもずっと上に違いない。

顔やスタイルは、お世辞にも美しいとか、女性として魅力的とは言い難い。なるほど、これではさほど人気が出ないのもうなずける。

当然、強くて美しいければ一番人気が出るのであるが、強くて醜い者と美しくて弱い者では、一般に後者の方が人気が高い。それが男の闘奴との大きな違いだ。

アユミも決して目を見張るような美少女というわけではないが、顔はそこそこ整っているし、なによりこの場でアユミの小柄で線の細い身体は、観客の目には実際以上に華奢で可憐に映る。

それでいて試合では新人としては悪くない成績を上げているのだから、人気が出てくるのも当然といえた。

観客は、アユミを応援しているものが圧倒的に多い。そんな観客を、対戦相手 名前はマイラとかいったらどうか が威嚇する。

向こうは、アユミを舐めている様子がありありと見て取れた。いつものことだ。実際にアユミを目にすれば、その外見だけで客に受けていると思われても無理はない。ずいぶん自信ありげな態度だ。

アユミも余裕のある表情を見せたかったが、とても無理だった。どうしても怯えたような、不安げな顔になってしまふ。意識してやっているわけではないそんな表情が客には喜ばれているというのだから、心境は複雑だ。

審判が、二人の鎖を外す。

続いて、武器を持っていないことを確認する。考えてみれば、これも無意味なことだった。胸と局部を最小限に隠しているだけの格好で、どこに凶器を隠せるというのだろうか。

今日、何十回目かの溜息をついた。それでも、どんなに心が重くても、闘わなければならぬ。

試合開始の合図である鐘が鳴らされる。観客席全体が呻りを上げる。

アユミは両拳を軽く握って、顔の前に構えた。

マイラが近付いてくる。腕力を誇示するような格好で拳を握りしめ、薄笑いを浮かべている。

アユミは慎重に間合いを読んだ。

リーチは相手の方が遙かに長い。間合いを読み間違えたら、リーチが短くて体力的に劣るアユミに勝ち目はない。

相手の視線、構え、足運び。

ひとつひとつを観察する。

それほど優れた技術を持っているようには思えない。腕力にものをいわせて、力任せに殴りつける戦法だろう。

確かに、並の相手であればそれで充分勝てるのかもしれない。上腕の筋肉は、女性としてはかなり太い。

マイラの拳が届く間合いに入る瞬間、アユミは自分から前に出た。タイミングをずらされた相手が一瞬ぎこちない動きを見せる。

同時に、低い姿勢から脚を蹴り上げた。

つま先が、鳩尾に突き刺さる。マイラの身体が

くの字に曲がる。

前屈みの体勢になったことで、顔がちょうど攻撃しやすい高さに来た。顎を狙って、左右の掌打を続けざまに叩き込む。

マイラはふらついて、焦点の合わない目で二、三歩下がった。

そこを追撃する。

大きく前に踏み出すと同時に、身体を独楽こまのように回転させる。

上段の後ろ回し蹴りが、相手のこめかみにヒットした。マイラはそのまま、砂煙を上げて倒れる。周囲から、割れるような歓声が上がった。いきなりの大技に沸き立っている。

誰よりも速く、鋭い蹴り。この華麗な技も、アユミの人気の秘密だった。

アユミは、倒れている相手に慎重に近付いていった。

まだ、審判はアユミの勝利を宣言していない。相手が立ち上がってくる余力があるかどうかを確かめ、とどめを刺さなければならなかった。

マイラは意識を失っている……ように見えたのだが、近付いたところでききなり足首を掴まれた。あつ、と思った時にはもう遅い。アユミは地面に引き倒されていた。

相手が背後に回り込む。

固い筋肉をまとった太い腕がアユミの細い首に回され、力ずくで締め上げてくる。

マイラはそのまま立ち上がった。軽いアユミの身体を吊り上げるような格好で、まともに気管を締めている。本来は反則なのだが、凶器の使用や目への攻撃と違って、よほど悪質なものでない限り審判は見逃すのが普通だった。

もしかしたら、審判や主催者による演出なのかもしれない。最初にアユミが大技を決めたのだから、ここは相手が反撃した方が盛り上がる、と。

アユミはもがきながら、首を締め上げている腕を掴んだ。太く固い腕は、アユミの握力くらいではびくともしない。

「さあ、今度はこっちの番だよ。といっても、二度とあなたの番は来ないけどね」

背後でマイラがつぶやいた。

同時にアユミの身体が振り回される。

「っ！」

そのまま、試合場の柵に叩きつけられた。あまりの衝撃に、悲鳴すら出なかった。

それでもまだ、マイラの腕はアユミを放さない。もう一度引き起こし、また叩きつける。

さらにもう一度。

アユミの顔が苦痛に歪む。

観客はさらに盛り上がっている。攻められている時のアユミの表情には、見ている者をそそのめるものがある、と言われたことがあった。

「ほら、もっと客を喜ばせてやりな！」

三度、柵に叩きつけられた後、マイラは動きを止めてさらに腕に力を込めた。

呼吸が苦しい。

脳への酸素の供給が滞り始める。

視界が暗くなっていく。

意識が朦朧としてくる。

このままでは、失神してしまう。

このままでは、負けてしまう。

このままでは……。

「……………」

無意識のうちに、足が動いた。マイラの足の甲を踵で踏みつける。

苦しそうな声上がる。もう一回。

首を絞めている腕の力が緩んだ。身体を左右に振って動く余裕を作り、肘を真後ろへ振る。

手応えがあつた。声にならない短い悲鳴と共に、腕が解ける。

アユミは振り向きざま、左の中段回し蹴りを叩き込んだ。まともに脇腹に決まる。

左脚が地面に着くと同時に、右足が跳ね上がる。回し蹴りをもう一発。

マイラの顔が、苦悶のあまり醜く歪んだ。少なくとも、肋骨にひびは入ったはずだ。

それでもアユミは動きを止めなかった。地面に着きかけた右足を、そのままもう一度蹴り上げる。今度は、喉を狙った前蹴りだ。爪先でまともに蹴り込む。

相手の身体は大きくぐらついた。防御の構えをとることもできずに、ふらふらと下がっていく。

観客は、今度こそ倒れるのかと思つたことだろう。しかしその前に、アユミが跳んでいた。

短い助走をつけて高く跳び、前方宙返り。最高点で一瞬身体を丸め、そこから一気に伸び上がる背筋の力に重力加速度を加え、真上から踵を叩きつける。

蹴りが当たる寸前に相手がよろけたため、わずかに狙いが外れた。体重の乗った踵は、脳天ではなく肩のあたりに命中する。

鎖骨が折れる感触が伝わってきた。

マイラの身体が、その場に崩れ落ちる。今度こそ、ぴくりとも動かなかった。

鐘が鳴らされる。

審判が片手を上げ、アユミの勝利を告げる。

その声はかなり大きなもののはずだったが、それ以上の大歓声にかき消され、アユミの耳には届かなかった。

声援がアユミを包み込む。

大技の連発に熱狂した観客たちが、アユミの名前を連呼している。

しかし、そんなことはどうでもいいことだった。肩で息をしながら、アユミは言いようのない疲労感に包まれていた。柵に叩きつけられた時に打った肋骨が、今さらのように痛み始めている。疲れた。

実際に闘っていた時間以上に消耗しているようだ。

今はただ、ゆっくりと眠りたかった。

この後は、少なくとも数日はアユミの試合はないはずだ。

だから、ゆっくりと眠りたかった。

眠っている間だけは。

夢の中でだけは。

自由でいられるから。

* * *

しかしその夜は、望んでいた休息は与えられな

かった。

アユミは全裸で手足を縛られ、大きなベッドの上で大の字にされていた。

「今日の試合は良かったわよ、アユミ。久々に興奮したわ」

美しい女性がアユミの顔を覗き込む。

口元に、サディスティックな笑みが浮かんでいた。

顔が、ゆっくりと近付いてくる。

唇が重ねられる。

それを拒む自由はない。

「今夜はご褒美に、うんとお前を可愛がってあげる」

「っ！」

アユミは声にならない悲鳴を上げた。

胎内に入ってくる異物。

女として成熟しきっていない身体が受け入れるには大きすぎる、男性器を模したグロテスクな器具が深くねじ込まれる。

「いついやあっ！ あああっっ！」

「相変わらず、いい声で泣くわね」

女の手の動きが激しさを増す。悲鳴のオクターブが上がる。

アユミが顔中くしゃくしゃにして泣き叫ぶほどに、女は嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「お前たちも可愛がつてあげなさい。もつといい声を出せるように」

「はい」

傍にいた二人の女性が、左右に分かれてアユミの小さな乳房を愛撫する。

手で、舌で、未成熟なアユミの身体を弄ぶ。

二人は先輩の闘奴だった。同じ主人に所有されている、キャリア、実力共にトップクラスの闘奴たちだ。

そして、脚の間でアユミの女の部分を責め立てているのがアユミたちの主人、マレイア伯爵夫人 通称レディ・マレイア だった。

父親から受け継いだ莫大な財産でなにひとつ不自由のない生活を送り、二十人を越える女闘奴を所有する闘技マニアだ。同性愛者であり、毎夜の

ようにこうしてお気に入りの闘奴を凌辱するのが趣味でもある。

もつともそれは、レディ・マレイアに限った話ではない。女闘奴の多くは、また、性奴でもある。主人が自分の闘奴に手を出すことなど当たり前のことだし、中には、闘技で人気の出た闘奴に客を取らせて商売にしている者もいるという。

それに比べれば、レディ・マレイアの闘奴たちは幸せな方かもしれない。彼女は自分の趣味で自分の好みに合った闘奴を集めているのだから、間違っても客を取らされることなどない。主人と、先輩の闘奴の言うことさえ聞いていればいいのだ。だからといって、それが救いになるわけでもない。ここまで来たら、もう何があっても同じではないか。

アユミは泣きながら、レディ・マレイアが満足して、早く自分を解放してくれることだけを祈っていた。

札幌市南区奏珠別にある北原極闘流空手の道場は、息が詰まるような熱気に包まれていた。

なにしろ真夏の午後である。一応は空調の効いている建物とはいえ、焼け石に水、という程度の効果しかない。

これでは稽古している者たちは大変だろう、と早苗は思った。道場の隅に座って見学しているだけでも、じつとりと汗ばんでくるのだから。

それでも。

たとえ室温が耐え難いほどに高かったとしても、彩樹が空手をしているところを見るのは好きだった。だから、夕方から一緒に遊ぶ約束をしていたものを、少し早めに道場まで迎えに来たというわけだ。

（やっぱり、カッコイイな）

思わず彩樹に見とれてしまう。

精悍な、野性味溢れるそのルックスに加え、一部の無駄もない、完成された芸術品のような動き。

見ていると、感動のあまり溜息が出てくる。たとえ、その正体が女たらしでサドで鬼畜だとわかっていても。

（あれで性格がもう少しまともならね……）

つつい、無駄なことを考えてしまう。しかし、あの性格は今さら変えられまい。

それでも稽古中は、もっとも「シリアスでカッコイイ」彩樹を見られる時だった。

だから、ここに来てしまうのだ。

彩樹は今、女子部の後輩の指導をしている。最近まで女子部と少年部の指導員をしていた進藤沙紀という先輩が、就職して東京へ行ってしまったため、女子では実力ナンバーワンの彩樹が、女子部の面倒を見ているのだそうだ。

こうして見ていると、普段の彩樹からは考えられないくらい真面目に指導をしている。なんだかんだいっても、やっぱり空手が好きなのだろう。

しかしやがて、早苗は「おや？」と思った。

後輩の型がおかしい部分を指摘する際、妙に身体に触れる回数が多いはないだろうか。

(……やつぱり)

考えてみれば、合法的に後輩の女の子に触れるチャンスである。あの彩樹が逃すはずはない。

早苗は呆れて肩をすくめた。

* * *

その夜、早苗は彩樹の家に泊まった。

彩樹の親は夜の仕事だから、夜遊びには都合が
いいのだ。夜中過ぎまで騒いでいても、お酒や煙
草をいたずらしても、怒られる心配もない。そし
てもちろん、もっと「イケナイ」ことをしていた
としても。

「やつ……ああんっ！」

彩樹のベッドの上で、早苗が身体を擦る。

大きな胸が揺れる。

特大のゼリーのようにつるんと震える乳房を、

彩樹の手が乱暴に掴んだ。

指が食い込むほどに強く揉まれる。

「んっ……やあ……」

健康的に日焼けした身体の中で、その部分だけ
が白く水着の跡を残していた。しかし胸の大きさ
と比較すると、水着が覆っていたと思われる面積
はずいぶん狭い。

それは、彩樹のせいだった。

早苗はこの夏、何度も彩樹と海やプールへ行っ
たのだが、夏の初めに彩樹が買ってくれた水着は、
健全な女子高生としては少々過激なデザインだっ
た。

しかしいくら恥ずかしくとも、彩樹と海に行く
時には買ってもらった水着を着ないと怒られてし
まう。早苗は泣く泣く、彩樹の目の保養に協力し
てきたのだ。

「あ……ふう、んっ！」

小麦色の部分と白い部分の境界線上に、彩樹の
唇が押し付けられる。

そのまま、強く吸われる。

抑えようにも抑えきれない声が、身体の奥から
漏れてしまう。

彩樹の下から逃れようとしても、がっちり組

み伏せられていてはどうにもならない。

「だめえ……。明日はいつちゃんとプールに行く約束してるんだからぁ。キスマークつけないでよ……」

「ヤダ」

「もお……」

早苗は頬を膨らませる。

彩樹はサドで、意地悪だ。早苗が嫌がることほど、喜んでしようとする。

嫌がること、抵抗すること、泣き叫ぶこと。

そんな反応がすべて、彩樹を悦ばせてしまう。

結局、どうあがいたところで彩樹には敵わないのだ。体力、経験、そして性格。早苗が勝てる要素などまるでない。

早苗は諦めの気持ちで、彩樹に身体を委ねるところにした。

しつこく胸を責め立てていた唇が、やがて下へ移動を始める。大きな膨らみの上に、いくつも朱い痕を残していく。

胸ばかりではなく、お腹の上にも。

そして、もつと下にも。

下半身の、逆三角形をした白い日焼けの跡に、キスマークがひとつずつ増えていく。

それにつれて、早苗の声が少しずつ大きくなっていく。

「ふ……うんっ、あ……」

指が、そこに触れる。

ゆつくりと、かき回すように。

中へと入ってくる。彩樹の長い指が、一番深い部分まで。

身体の内側から、早苗を弄ぶ。

「くっ、うんっ！ う……、んっ！」

どんなに抑えようとしても、声が漏れてしまう。早苗の身体は悦んで彩樹を迎え入れ、その愛撫に応えている。

「あああっ！」

身体が仰け反る。

すごく、気持ちがいい。

やや乱暴な彩樹の指使いが、しかしたまらなく気持ちいい。

何度されても、飽きることがない。されればされるほど、より気持ちよくなってくる。初めての時は、痛くて泣いてしまったというのに。

(初めての時……かあ)

もう、ずいぶん前のことのように感じるが、実際にはまだ半年と経っていない。

それは、今年の春のこと。

中学生の時に彩樹と知り合ってから、数え切れないくらい押し倒されて、それでもなんとか抵抗を続けてきたけれど、ついに押し切られてしまった。

彩樹のことは好きだったけれど、できれば初めでは普通に「好きな男の人」であって欲しかったのに。その後なら、ちよつとくらい彩樹の相手をしてもらいたいかな、なんて思ってたのに。

結局、彩樹に奪われてしまった。

そのせいだろうか。以前よりももっと彩樹のことが愛おしい。

(ウチの初めての人、だもんなあ……)

こんなことなら、さっさとシルラートに抱かれ

てしまえばよかっただろうか。しかし彼が相手だったとしても、「普通の」シチュエーションではないことには変わりない。なにしろ異世界の王族で、王位継承権第一位の人物で、ついでにいえば巨乳フェチだった。

もちろん今では、彼とも肉体関係がある。彩樹との初体験のすぐ後で、「一度やったら二度も三度も一緒」とシルラートともしてしまった。

それから四ヶ月。二人との関係は今も続いている。

どちらも好きで。

どちらに抱かれるのも、それぞれすごく気持ちよくて。

(ウチってひょっとして、二股がけの悪女？……なーんてね)

健全な女子高生としてはあんまりいいことじゃない、と思っただけでもない。それに「健全な普通の女子高生」のままでは、彩樹とは対等に付き合えないのだ。

「あーあ、もう。すっかり、彩ちゃんあやなしではないられない身体にされちゃったなー」

事が終わって、裸のまま抱き合って余韻に浸っていた時、早苗は彩樹の頬を指先でつついて、冗談めかした口調で言った。

「責任取ってよね、彩ちゃん」

「いいよ」

彩樹はごくあっさりと応える。

「んじゃ、オレと結婚するか？」

「……はあ？」

あまりにも予想外の回答。早苗は呆れ顔で訊き返した。

「……ここは日本で、ウチも、一応彩ちゃんも、

どっちも女なんだけど？」

たとえ、外見も性格もまるで女らしくないとしても。

「そうだなあ。オランダやドイツの国籍って、どうやったら取れるんだろ」

「……って、マジな顔して言わないでよ！」

もちろん冗談だとは思っているが、彩樹が真顔なのでつい赤面してしまふ。

もっとも、女つたらしの彩樹のこと、どんな大ボラだろうと齒の浮くような口説き文句だろうと、顔色ひとつ変えずに口にすることができのらう。

それはわかっていても、やっぱり動悸が激しくなる。

「イヤか？」

急に真剣な顔をして言うから、ドキツとしてしまふ。

「イヤじゃないけど……、彩ちゃんてば、心にもないことを」

「心にもない？」

「本当に好きな相手は、他にいるくせに」

「……」

彩樹の眉がぴくつと動く。その表情の変化に気付いた早苗は、自分が地雷を踏んでしまったことを悟った。彩樹はいくつも、他人には触れられないくないことを抱えている。口元に、危険な笑みが

浮かんでいた。

「早苗？」

「……いや……まあ、その、ね？」

早苗は引きつった愛想笑いを浮かべて、ベッドの端へと後退る。彩樹がじりじりと近付いてくる。絶体絶命のピンチだった。彩樹を怒らせてしまった。

しかし、心のどこかで奇妙な満足感も覚えていた。彩樹の前で地雷を踏める人間はそうそういない。そのわずかな人間の一人であることが、早苗はなんとなく嬉しかった。

「……まだまだ夜は長いよなあ、早苗？」

「あ、あはは……そ、そんなこと。明日は朝早いし、そろそろ寝ようかなあ……なんて」

「させると思うか？」

彩樹の手が伸びてくる。肩をがっちりと掴まれた。

「今夜は、極太の刑」

低い声で宣言する。

「やあああつ！ 極太はイヤあつ！ あれ、痛い

の！」

「じゃ、後ろか？」

「お、おしりはもつといやあああつっつ！」
力強い腕が、早苗を乱暴に引き倒す。彩樹のもう一本の手は、どこから取り出したのか長いロブを持っていた。

* * *

「ふああああ……」

早苗は大口を開けて欠伸をした。それでも、眠気は去る気配を見せない。

「早苗さん、眠そうですわね」

隣を歩いている一姫いっきが、不思議そうに訊いてくる。

「ん……そーだね……眠い……」

昨夜は結局、ほとんど眠らせてもらえなかったから。

一晩中、彩樹に「あんなこと」や「こんなこと」をされていたから。

まだうつすらと縛り痕が残っている手首や下半身のごく一部が、ひりひりと痛んだ。できれば今日は一日ゆっくりと眠っていたところだったが、一姫とプールに行く約束をしていたのでそういうわけにもいかない。

「早苗さん、そんなに夜更かししていたんですか？ 何をしていたんですの？」

「え……いや、ちょっとね……遅くまでビデオ観てて」

早苗は嘘をついた。正直に「朝まで彩樹と一緒にいた」と言えば一姫はやきもちを妬く。彩樹と早苗の関係は彼女も知っているし、自分だって彩樹に抱かれてはいるのだが、それでも面白くないのが乙女心というものなのだろう。

「……あれ？」

のんびりと歩いてプールへと向かう途中、何気なく横を向いたら彩樹の姿が目に入った。

公園の芝生の上、ちょうど木陰になっているところで昼寝をしている。

彩樹は一人ではなかった。女の子の膝枕で眠っ

ている。

(あの子……)

遠目にもわかる、綺麗な女の子だった。

ストレートの長い髪が美しく、全身から上品なオーラが漂っている。二十一世紀になって数年が過ぎた今日では絶滅危惧種に指定されているという「良家のお嬢様」といった雰囲気だ。

その少女は静かに微笑んで、眠っている彩樹の髪を優しく撫でている。

(……ほら、やつぱり)

本当に好きな相手は、他にいくせに 早苗が昨夜言った通りだ。

あの子こそが、彩樹の「特別」だった。

名前は知らない。彩樹は「栞しお」と呼んでいたが、それも本名ではないらしい。本人に訊いても名前を教えてくれないから勝手な名前で呼んでいる、と言っていた。

わかつているのは、遠くに住んでいて時々奏珠別に遊びに来るらしい、ということだけ。

だけど、あの子が彩樹の「特別」。

あの子と一緒にいる時の彩樹は、普段とまるで雰囲気が違う。今だって、あんなに穏やかな表情で眠っているではないか。

(……)

早苗は、なんだか面白くなかった。

「……ちえっ」

つい、声に出して舌打ちしてしまう。それで、一姫も気付いてしまった。笑っていた顔が、見る間に不機嫌そうになる。

「彩樹さんってば、また！」

その変化は、まるで釣り上げたフグのようだった。小さな一姫の顔が、ぷうっと丸く膨れる。

のほほんとしたお嬢様の一姫だけれど、彩樹のことになるとすごいやきもち妬きなのだ。

実際のところ、妬いているのは早苗も同様だった。しかし一姫ほど素直に顔に出る性格ではないし、まだその感情を認めることにも抵抗がある。

確かに、彩樹のことは好きだけれど。それでもやっぱり、恋愛は普通に異性になりたいと思う。自分に同性愛の趣味があるなんて、認めたくはない。

とはいえ……。

やっぱり悲しい……いや、違う。悔しいのだ。

彩樹のことを一番理解しているのは自分だと自惚れていた。

一姫や、他の取り巻きの女の子たちよりもずっと、彩樹の本当の姿を知っている。知っていて、それでも彩樹を受け入れている、と。

しかし彩樹にとっての「一番」は、あの子なのだ。

(ずるいや。顔が翠みどりさんに似ているからって言うだけで……)

そう。

あの子は彩樹の姉に似ていた。

五年前に亡くなった、彩樹のたった一人の姉。

詳しい事情は早苗も知らない。それでも、彩樹が姉の死に妙にこだわっていることだけはわかる。それが、彩樹のあの性格の形成に関わっているということも。

だから、翠によく似たあの少女は「特別」なのだ。

「行きましょ、早苗さん」

いつの間にか立ち止まっていた早苗の手を、一姫が引つ張った。これ以上、他の女の子と仲良くしている彩樹を見ていたくないのだろう。ぷうつと膨れて、強引に早苗を引つ張っていく。

早苗は無言で後に続いた。

「久しぶりだな」

アリアーナは相変わらずの無表情で、口調も素っ気なかった。しかしこれはいつも通りの彼女の態度であり、彩樹たち三人の来訪に対してことさら特別な感情を持っていないわけではない。

むしろアリアーナは、三人娘が王宮を訪れることを歓迎しているようであった。同世代の対等の友人を持たない「女王」という立場にあるから、マウンマン王国に対するしがらみのない三人娘の存在は貴重なのだろう。

「……で、なんの用だ？」

見るからに不機嫌そうな彩樹が訊く。こめかみに青筋を浮かべているその表情は、まるで『不機嫌』という題の彫像のようだ、と早苗は思った。メイドが持つてきたお茶を喉に流し込みながら、アリアーナを睨め付けている。

しかしこれもいつものこと。アリアーナを前にした彩樹は、いつもこんな調子だ。

早苗と一姫は、ちらっと顔を見合わせて肩をすくめる。久しぶりに会ったのだから、もう少し愛想よくすればいいのに、と。

本当に、久しぶりだった。

自分たちの世界では夏休みだから、その気になれば毎日だってこちらに来られる。が、女王であるアリアーナは忙しい身だ。気軽に遊びに来るというわけにはいかない。

今日は、久しぶりにアリアーナに呼び出されたのだ。「見せたいものと、そして大事な話があるから必ず来い」と。

そして、「サイキはたとえ女の子とベッドの中にいようと連れてこい」という念のいったお達しだった。先に合流した早苗と一姫が迎えに行くのと、彩樹は後輩の女の子相手にまさしくその通りの光景を繰り広げていて、二人は文句を言う彩樹に何発か殴られながら、それでもなんとか連れてきたのだ。彩樹の不機嫌はそのためである。

しかし、アリアーナが「至急」と言うからには、何か重要な用事があるのだ。急いで行かないわけ

にはいかない。

「詳しい話は現地でしょう。まずは移動だ」

アリアーナの隣に立っている異母兄のシルラートが、早苗に色目を使いながら言った。

* * *

「オレは帰る」

王宮の中庭に用意されていた「移動手段」を見るなり、彩樹の顔色がさつと青ざめた。

有無を言わず、そのまま回れ右する。

そこにいたのは、大きな……というか、巨大な二頭の動物だった。外見は、太古の翼竜によく似ている。

飛竜。この世界で、長距離かつ緊急の移動に用いられる家畜である。見るからに恐ろしげな外見をしているが、その割に知能は高くて大人しく、人によく慣れる。ただし、極めて数が少ないため、飛竜を所有できるのは王族と、ごく一部の有力貴族に限られていた。

そして。

これが、彩樹の唯一の弱点である。

彩樹は別に、飛竜そのものを恐ろしがっているわけではない。喧嘩であれば、たとえ相手がティラノサウルスだろうとゴジラだろうと、敵に後ろを見せる彩樹ではない。

問題は飛竜の能力と、それを活かした用途なのだ。

彩樹は、重度の高所恐怖症だった。

最新のジェット旅客機でもダメなのに、まともな風を受け、羽ばたき、眼下の見晴らしのいい飛竜などもつてのほかだという。

その気持ちは、早苗たちも分からないでもない。平成の時代の日本で生まれ育った女子高生にとって、飛竜は決して乗り心地のいい乗物ではない。しかしそれ以上に、竜の背に乗っての飛行というのは刺激的で魅力的な体験であり、嫌がっているのは彩樹一人だった。

しかし、急いで遠くへ移動するなら他に選択肢はない。

止めようとする早苗と一姫を無視して城内へ戻ろうとした彩樹だったが、十歩ほど歩いたところで、その場に崩れるように倒れてしまった。

一姫が慌てて駆け寄る。見ると、早苗は地面の上で寝息を立てていてではないか。

「こうなると思っていた」

抑揚のない声でアリアーナが言う。

「だから、サイキのお茶に一服盛っておいた」

「……はあ」

早苗は感心しつつも呆れたような溜め息をついた。さすがはアリアーナ、彩樹の性格をよく把握しているし、やることに容赦がない。

意識のない彩樹をシルラートが担ぎ上げ、飛竜の背に取り付けられた座席に乗せる。御者席にはアリアーナが座り、一姫が彩樹の隣に腰を下ろす。

ここにいる五人で飛竜を操れるのはアリアーナとシルラートだけ。早苗は否応なしに、シルラートと二人でもう一頭の飛竜に乗せられた。巨乳フェチのシルラートは、早苗が大のお気に入りなのだ。

* * *

飛竜の背に乗っての旅は、三時間以上も続いたろうか。着いたのは、マウンマン王国の属国だという小国の都市だった。

郊外に、シルラートの別荘があるのだという。

別荘に到着する直前に目覚めた彩樹はいうまでもなく不機嫌だったが、出迎えたメイドが胸の大きな美少女だったのですっかりご機嫌になっていた。

しかし早苗はちよつとばかり複雑な気分だ。メイドのプロポーションからも、雇い主の趣味が伺える。

「サイキ、なんだったら、今夜は彼女と一緒に寝てもいいぞ」

シルラートが言う。彩樹の目がキラリと光った。「いいのか？」

「ああ、私は今夜、サナエがいるからね」

「勝手に決めないでくださいよ！」

当事者を無視して話が進むので、早苗は一応文句を言う。別に、シルラートと寢室を共にすることが嫌なわけではないが。

しかし。

「つまりシルラート様は、普段はあの子と一緒に寝ているんですね？」

瞬間、シルラートの動きが一瞬間まった。

「あ……いや……ここには滅多にこないし……」

しどろもどろに言い訳するシルラートを、早苗が軽く睨む。もとより、本気で怒っているわけではない。早苗だって、自分の世界では彩樹と『浮気』しているのだから。

屋敷で一休みした後、一行は馬車で外出した。

街の中心部へと向かって行く。行く手に、大きな建物が見えてきた。

「あれが、この街一番の名所の闘技場だ」

「闘技場？」

彩樹の眉がぴくりと動く。

「……って、古代ローマにあったような？」

「ローマ？ ああ、この間読んだ本に載っていたな」

早苗の質問に、アリアーナがうなずいた。彼女は最近、早苗たちや知内に頼んで入手した、向この世界の書物を読むのを楽しみにしている。

「まあ、似たようなものだ。貴族や裕福な商人たちが、自分が所有している闘奴を闘わせている」

「ほお」

彩樹が興味ありげに身を乗り出してきた。なにしろ根っからの格闘技好きだ。気にならないわけがない。

「特に、この闘技場は変わっていてね」

シルラートが後を続ける。

「大陸中から好き者たちが観戦にやってくる。この国の重要な収入源だ」

「変わって？」

「女性の闘奴ばかりで運営している闘技場は、大陸中を探してもここだけしかない」

「なんだって？」

彩樹の目に、先刻までとは違った光が現れる。格闘技好きである以上に、根っからの女好きなのだ。

いつものこととはいえ、早苗と一姫は呆れ顔で見つめていた。

闘技場では、当然のようにVIP席に案内された。

とはいえ、本当の身分を名乗っているわけではない。さすがに、宗主国の女王と王兄が揃って来ているとなると大騒ぎになってしまう。アリーナは薄いベールで顔を隠して、外国から来た貴族のふりをしていた。

「おお、やってるやってる」

彩樹が目を輝かせて、一番前の席に陣取った。試合場の中では、二人の女性が取っ組み合っている。

「サイキは、こっぴつのが好きだろう？」

「いいな。どうしてもつと早くに連れてきてくれなかつたんだよ」

観客席も盛り上がっている。貴族ばかりではない。むしろ客層は一般市民の方がはるかに多い。

実際の試合を目にして、早苗にも妙な盛り上がりの理由がわかった。男性の試合とは、また違った楽しみがあるわけだ。

なにしろ、闘っている女性はどちらも、ビキニの水着に似たひどく露出の多い衣装である。女子プロレスよりもほど過激だ。あれでは、試合中に外れてしまうことも多いのではないだろうか。もちろん、観客にとってはその方が楽しいのだろう。

試合そのものよりも観客席を観察していた早苗は、もう一つ気がついた。どうやら、試合は賭けの対象になっているらしい。いつてみれば、競馬や競艇のようなものだろうか。

（お色気とギャンブル……そりゃウケるよなあ）
同性としては顔をしかめてしまうところだが、まあ理解はできる。

それに、同性であるはずの彩樹が大喜びで観戦していることであるし。

「闘奴……って言いましたよね？ あの方たち、奴隷ですよ？」

一 姫が眉をひそめて訊く。アリーナは相変わらずの無表情でうなずいた。

「そうだな」

「そんな……」

「いいところも悪いところもあるとは思うが、ここは総合的に見てサイキたちの世界ほど豊かなところではない。貧しい国を援助するような、世界規模の組織もない。こうしてでも生きていかなければならない者たちもいる。それは仕方のないことだ」

「あ……」

確かに、そうだ。

早苗たちの世界でだって、奴隷制度はそれほど古い歴史ではない。実際、そうしなければ生きていけない者は存在するのだ。

戦争の捕虜。

貧しい農村で不作の年に売られた子供。

そして、奴隷の親から産まれた子。

人権とか福祉とか、それは結局のところ、豊かな者だけが口にできる贅沢な言葉かもしれない。

「一朝一夕には変えられん。明日は今日よりは少しでも良く……少しづつ変えていくしかない。この世界に生まれた以上、そうするしかない。この闘技場も、この世界の一部分だ。だが、そうではない者もいる」

「え？」

意味深な台詞に、早苗は首を傾げた。しかしアリーナはそれきり黙ってしまった。

代わりに、シルラートが楽しそうに言う。

「そろそろ、いい闘奴が出てくるぞ」

「詳しいんですね。しょっちゅう見に来てるとか？」

「あ……いや」

早苗は軽く皮肉を口にした。シルラートの女好きは既知の事実だから今さら気にすることではないのだが、こういう時は少しやきもちを妬いてみ

せるのが、惚れられている女の子の役目だと思っている。

「……試合構成はプロレスと一緒にか」

試合の合間に、彩樹が振り返る。

「最初は前座の試合。途中、人気中堅レスラーによる見せ場があつて、最後はトップ選手同士の対戦つてわけだ」

「まあ、そんな感じだな」

「で？ 今度出てくるのはどんな女なんだ？ お前好みの巨乳か？」

「いいや、きつと君好みだろう、サイキ。次の娘がいま売り出し中で、なかなかの人気なんだ。よく見ておくといい」

「……？」

先刻のアリアーナ同様、シルラートも意味深な表情を浮かべていた。試合に夢中の彩樹は気付いていないらしいが、早苗は奇妙な感覚を受けていた。

アリアーナもシルラートも、どうやら彩樹をここに連れてくるのが目的だったらしい。

しかし、何故？

早苗の疑問は、大きな歓声で打ち消された。

観客がさらに盛り上がっている。連呼している二つの名前は、次の試合に登場する闘奴の名だろうか。

割れるような歓声に包まれて、黒いマントを身にまとった女性が現れた。

一目見て、早苗も納得する。なるほど、あれなら人気も出るだろう。

長い黒髪をなびかせて颯爽と歩くその姿は、遠目にもかなりの美人だとわかる。背は高めでスタイルもいい。その上で、バランスの取れたスポーツ選手のような身体つきである。外見だけでなく、運動能力もなかなかのものだろうと伺える。

「あの人が、人気の闘奴？」

「いいや。確かに彼女は以前から人気あるけどね。いま一番の売り出し中は、その対戦相手だ」

「……相手？」

「ほら」

シルラートが指差した方を見る。

「えーっ？」

早苗と一姫が揃って声を上げた。

それは、小柄な女の子だった。女子としては平均的な身長及早苗よりも、ずいぶんと小さくて華奢に見える。年齢的にも早苗たちより下ではないだろうか。

しかも、どちらかといえば内気な雰囲気があった。これまでの鬪奴は、個人差はあれ全体的に体育会系の雰囲気を持っていたのとは対照的だ。

全体的に線が細く、髪は短めだ。幾分、おどおどしているようにも見える。

「あんな子が……鬪奴？ 売り出し中ってことは強いのか？ あんまり、そうは見えないけど」

「強いよ。そのギャップが人気の秘密なんだ」

「へえ……」

あまりにも場違いな雰囲気少女に気を取られていた早苗は、彩樹が表情を強張らせて急に黙ってしまったことに気付いていなかった。

アユミは、いつになく緊張していた。

今日の相手は、おそらくこれまでで一番の強敵だ。

ルミネ・シーン。

まだ二十歳になるかならないかという年齢のはずだが、闘奴としてデビューしたのはアユミよりも若い頃ということで、キャリアは長い。

これだけ長く闘奴を続けていられるということは、相応の実力があるということだ。この世界、力のない者は簡単に淘汰されてしまう。

それになにより、ルミネは容姿が素晴らしい。ややきつい顔立ちの美人で、背が高くスタイルも見事だ。おそらく、上位ランクの闘奴の中では一番の美女だろう。

長い黒髪をなびかせ、髪の色と同じ黒のマントで登場する姿は観客にも大人気だ。

格下の相手を執拗にいたぶる趣味があることと、勝つためには汚い手も使いたいということと、

闘奴の中には嫌う者も多いが、観客にとっては適度なダーティさも魅力のひとつである。

明らかに、アユミがこれまで闘ってきたよりもワンランク上の相手だった。

緊張する。

相手は格上の人気闘奴。もしもこの試合に勝てれば、アユミの評価もぐんと高まる。

アユミは何度も深呼吸した。喉が渴いて、水を口に含む。

格上の相手と闘ったことは何度もあるが、これほど緊張するのは初めてだ。試合前に緊張するのはいつものこととはいえ、こんなにも激しい動悸は経験したことがない。

大丈夫、大丈夫。

何度も、自分に言い聞かせる。

ルミネの試合は、何度か見たことがある。

確かに強いが、決して勝ち目がないわけではない。自分が学んだ技は、十分に通用するはずだ。

胸の上に手を当てる。

激しい鼓動が、はつきりと伝わってくる。

(大丈夫……落ち着いて……)

何度も言い聞かせる。

どうしてだろう。こんなにも、なにかが起こり
そんな予感がするのは。

* * *

試合場に出ると、そこにルミネがいた。

意外だった。普通は、格上の者が後から入場する
ことが多いのだが。

それまで観客の声援を一身に受けていたルミネ
が、見下したような笑みを浮かべてこちらに顔を
向けた。

突き刺すような鋭い眼光に気圧されてしまう。

それでもやっぱり、間近で見るルミネは美しかった。

すらりとした見事なプロポーション。それでも
必要十分な筋肉はまとっている。アユミのように
か弱い印象を与える細さではなく、力強い生命力
を感じさせる美しさだ。これまでの戦績と人気に

よる自信が、その外見に表れていた。

「さあ、かかってらっしゃい。可愛い子猫ちゃん」

試合が始まると同時に、ルミネは挑発するよう
に言った。もちろん、充分に大きな声で。観客席
からわつと歓声が上がる。この尊大な態度こそが、
ルミネの魅力なのだ。

アユミは油断なく顔の前で拳を構え、じりじりと
間合いを詰めていった。二メートルほどの距離ま
で近付くと、低い姿勢から一気に相手の間合いに
飛び込んだ。

ルミネが、右の拳を打ち下ろすように殴りか
かってくる。それを腕で払うように受け流し、懐
にもぐり込む。

「ちっ」

間をおかずにルミネは左の拳を繰り出してくる
が、アユミの方が一瞬速かった。

「はあっ！」

右足を前に大きく踏み出す。同時に、中段の順
突きをルミネの胸に打ち込んだ。

ずしりと重い手応えが伝わってくる。その拳を引きながら、すかさず左の正拳突き。そしてもう一度右。

一息で三発の中段突きを叩き込んだ。

ルミネの体勢が大きく崩れる。その脚を狙って下段蹴りを放ったが、相手は大きく後ろへ跳んでこれをかわした。

「あんだ、やるじゃない。ただのちびじゃないんだ」

余裕のあるところを見せようとしたのか、ルミネは笑みを浮かべて言う。しかし幾分苦しそうだ。今の攻撃は間違いなく効いている。

回復する隙を与えず、アユミは再び間合いを詰めた。相手が先手を取って蹴りかかってくる。半身になって蹴りをかわし、体重の残っている軸足に下段蹴りを入れた。

ルミネはよろめきながらも、アユミの顔を殴りつける。しかし体勢が崩れていたせいで、さしたるダメージはない。

無理な反撃でさらに体勢を崩した隙を見逃さず

に追撃する。

腹を狙ったの二連突き。あえてまだ顔は狙わない。身長差があるから、もっとダメージを与えてからでなければ反撃を受けずに頭部を狙うのは難しい。

ヒット・アンド・アウェイに徹するアユミが離れると、ルミネはその場に片膝を着いた。

(……大丈夫、勝てる)

まだ動悸の治まらない心臓をなだめるように、アユミはつぶやく。

勝てる相手だ、と。

スピードでは完全にルミネを凌駕している。手の動きは完璧に見えている。無理な深追いをしない限り、大きな反撃を喰らうことはないはずだ。非力なアユミにはルミネを一撃でKOする力はないが、ボディを狙ってダメージを蓄積させ、頭が下がったところで上段回し蹴りのような大技を決めればいい。

ルミネの顔から余裕の笑みが消えていた。アユミの攻撃が効いている証拠だ。怒りの表情を浮か

べて睨め付けてくる。

客席は、異様なほどに盛り上がっていた。これまでの実績を考えれば、試合前の予想は圧倒的にルミネ有利だったのだろう。なのにアユミが攻勢だから、ルミネのファンは悲鳴を上げているし、アユミに賭けていた者は喉が潰れそうな声で声援を送っている。

「この……」

口元を歪ませて、ルミネが立ち上がる。ひどく悔しそうだ。

彼女の性格からすると、格下のアユミに押されていることもあるだろうが、それ以上に観客を取られていることが我慢ならないのだろう。

初めて、向こうから仕掛けてきた。

前へ踏み込みながらの右フック。しかし距離が遠い。アユミはほんの数センチ頭を下げるだけでよかった。頭に血が昇っているのだろうか、無駄な大振りだ。

空振りしたところで、がら空きになった脇腹を回し蹴りで狙おうとした。

しかし次の瞬間。

「っ！」

両目に鋭い痛みが走った。突然の激痛に目を開けていられなくなる。

「な……っ？」

わけがわからずにいるうちに、頭部に激しい衝撃が加えられる。殴られたのだ。

さらに一発、二発。立続けに殴られる。一発がまともに鼻に当たって鼻血が流れ出した。

アユミは目を閉じたまま、腕を上げて顔面をガードする。すると今度は腹を蹴られた。細い身体が枯れ草のように折れ曲がる。

この時になってようやく、目に砂を投げつけられたのだと気がついた。あの、大振りの右フックの時に。

最初からそれを狙っていたのだろう。勝つためには汚い手も平気で使う、というルミネの噂を思い出した。

形勢は一気に逆転した。

目を開けていられないアユミは、いいように殴

られ、蹴られてしまう。見えなくてはガードもま
まならない。

顔を殴られて、額か瞼を切ったらしい。今度は、
血が目の中に流れ込んできた。これではまったく
相手を捉えられない。

見えていけば、拳が当たる瞬間にほんの数セン
チ身体を動かしたり筋肉を硬直させるだけでも衝
撃はずいぶんと軽減できるのだが、まったく心構
えのできていないところを殴られた時のダメージ
は遙かに大きい。数発で、アユミの意識は朦朧と
し始めた。

もう、相手の気配も感じられない。

突然、背後から首に腕を回された。掴まれたま
ま、側頭部や脇腹をいよいよに殴られる。アユミ
の身体から、力が抜けていく。

気付いた時には、胸を覆っていた布が剥ぎ取ら
れていた。客席が沸く。

なんとか逃れようとしても、ルミネの長い腕は
細い首をぎりぎり締め上げてくる。もう一方の
手が、アユミの未熟な乳房に爪を立てた。

「あんだ、すごい人気じゃない。もっと客を喜ば
せてやりたい？ なんなら下も剥いてやるう
か？」

耳元で嘲るような声がする。

「このまま締め落とすのは簡単だけどね、それ
じゃ面白くない。その可愛い顔がふた目と見られ
ないようになったら、それでも客はあんだを応援
するかな？」

背筋が凍るような、サディスティックな声音
だった。

同時に、身体が自由になる。首を絞めていた腕
が離れたのだ。

突然のことに戸惑ってふらついたところを、ま
た殴られた。体重の乗った、重いパンチだった。

二発、三発。

なんとか距離を取ろうとしても逃げられず、執
拗に顔を殴られる。

口の中いっぱい、血の味がした。

脚から力が抜け、その場に崩れ落ちる。しかし
俯せになったところで髪を掴まれ、無理やり立た

された。

「まだまだ、もっと客を楽しませなさい」

また、殴られる。

髪を掴まれて、腹に膝蹴りを入れられる。

何発も、何発も。

ルミネが手を放すと、アユミはその場にうずく

まった。胃液が逆流して口から溢れ出す。

また、髪を掴まれて引き起こされる。

顔面に、膝蹴りを叩き込まれる。

一発。二発。

三発目で、意識が遠くなった。

* * *

ざらざらとした固いものが、顔に押しつけられている。

なんだろう。

ぼんやりとした頭で答えに辿り着くには、ずい

ぶん時間がかかってしまった。

砂、だ。固い地面の感触だ。

(あたし……倒れてるんだ……)

いつ倒れたのだろう。どのくらい倒れていたのだろう。

試合はもう終わったのだろうか。もう、殴られなくてもいいのだろうか。

その問の答えは、髪を乱暴に引っ張る手だった。力ずくで引き起こされる。

顔に衝撃が走る。

意識が飛ぶ。

また、起こされる。

何度も何度も繰り返される。

血と砂が混じり合って、顔はどろどろだ。口の

中もじゅりじゅりする。

「……お願い……もう……ゆるして……」

「そんな小さい声じゃ、聞こえないわね」

頭を地面に叩きつけられた。

「勘弁して欲しければ、土下座してもっと大きな

声で許しを請いなさい。ちゃんと、お客さんに聞

こえるように」

「……っ」

脇腹に、さらに激しい衝撃が加えられる。蹴られたのだろうか。アユミの身体が地面を転がる。

ルミネはアユミをなぶり続けている。もう、勝敗は誰の目にも明らかなのに。

彼女のプライドを傷つけた報いがこれだった。

(……土下座?)

闘技場の中で。大勢の観客の前で。

闘奴にとって、これ以上の屈辱はない。

(……それでも……いいや)

そう思った。

もう、殴られたくない。

痛い思いをしたくない。

これ以上痛めつけられたら、本当に死んでしま
う。

(もう……立てないよ……立ちたくない……もう
やだ……)

このまま、倒れていきたいのに。

このまま倒れていけば、もう殴られなくてもいい
のに。

ルミネはそれを許してはくれず、何度でも無理

やり引き起こされ、殴られ続ける。

いつになったら、終わるのだろうか。

どれだけ我慢すれば、止めてくれるのだろうか。

「さあ、泣いて許しを請いなさい」

甲高い声が頭に響く。

(……もう……いいや)

もう、終わりにしよう。

こんなこと。

もう一度殴られたら、死ぬかもしれない。

一度じゃ無理でも、二度なら。

死ぬことができるかもしれない。

その方がいい。

そうすれば、もう痛い思いをしなくてもいい。

もう、二度と。

たとえこの試合が終わったって、いずれまた闘
わなきゃならない。

また、同じ目に遭うかもしれない。

結局、今置かれている状況から逃れるには
『死』という手段しかないのではないだろうか。

(……もう……いいよね……)

これだけ痛い思いをしたんだから。

そろそろ、解放されてもいいはずだ。

あとほんの少しだけ我慢すれば、楽になれる。

そう思ったアユミは、最後の力を振り絞ってよろよろと立ち上がった。

「……あ……あたし……謝ったりなんか……しないもん」

歯が何本か折れていてうまく喋れなかったが、それでも相手には伝わったようだ。ルミネの表情が一変する。

「……っ、じゃあ、死にな！」

これ以上はないという怒気を、無理やり押さえつけている声。

激怒している。

来る。

今度こそ、殺す気で。

これで、終わり。

(早く……来て……あたしを解放して)

一心にただそれだけを願っていたアユミの意識に、突然ひとつの音が割り込んできた。

場内を埋め尽くした歓声に混じって、たったひとつの音が何故かはつきりと聞こえる。

『バカ野郎っ！ 頭下げろ、右だっ！』

どうしてだろう。

アユミの身体は、反射的にその声に従っていた。その声は、従わなければならないもののように思えた。

微かに頭を傾ける。こめかみをルミネの拳が掠めていった。

『今だっ、極める！』

また、身体が勝手に動いてしまう。

ルミネの腕を掴んだ。目が見えなくても、身体が触れてさえいれば組技は使える。

腕をしっかりと掴まえて、ぶら下がるように体重をかけながら地面を蹴る。

振り上げた脚が、相手の首と胸に絡みつく。

飛びつき腕ひしぎ十字固め。昔、何度も何度も練習させられた技。

相手に体重を預けて倒れ込みながら、二人分の体重を利用する。腕力のないアユミでも、決定的

なダメージを与えることができる。

『折れ！ 躊躇すんなっ！』

どこかから聞こえてくる声の、最後の指示。

アユミの身体はやっぱり、その声に素直に従っていた。

「すごい。あんなにぼろぼろなのに、ついに勝っちゃったよ、あの子」

早苗は素直に感心していた。あるいは感動と
いってもいい。

相手の反則で絶体絶命のピンチに追い込まれて、それでも傷だらけの身体で立ち上がって、ついに奇跡の逆転勝利をものにしたのだ。涙が出そうなほどに感動する。

観客の多くも、早苗と同じ思いであるらしい。

場内は割れんばかりの歓声に包まれている。

「な、盛り上がるだろう、あの子の試合は。しかも今回は相手が相手だからね。清純派のアユミがよけいに引き立つ」

シルラートが可笑しそうに言う。

「……うん、恰好いいね。華奢だけど、技は綺麗だし。そういえば、構えとか突きや蹴りの形とか、ちよっと彩ちゃんに似てない？」

仲間らに肩を貸してもらって退場していく少女を

見送りながら、早苗はつぶやいた。

「あんなずるいことをする人は、負けて当然ですわ」

アユミがいたぶられている最中、泣きそうな顔をしていた一姫が、ようやく笑顔を見せる。

「でも、最後に勝てたのは彩樹さんのアドバイスのおかげですわね。……彩樹さん？」

返事がないのを訝しんだ一姫が、彩樹の顔を覗き込む。

早苗も、この時になってようやく気付いた。

彩樹が、奇妙に引きつった表情を浮かべている。ぎゅっと握りしめた拳は、力の入れすぎで白くなっていた。

「どうして……どうして……」

震える唇で、微かにつぶやいている。

「……彩ちゃん？」

早苗の呼びかけにも反応がない。傍目には、全身が強張っているように見える。

「わかったろう、サイキ。どうしてここに連れてきたのか」

背後から、アリアーナが淡々と言う。

「どういうことだっ！」

なんの前触れもなしに、突然彩樹が爆発した。

振り返って、アリアーナをきつと睨みつける。

「どうしてっ、どうしてあいつがこんなところに
いるんだっ？」

噛みつくようにアリアーナに詰め寄り、その肩
を乱暴に掴んだ。しかりアリアーナは表情を変え
ない。

早苗と一姫が目を丸くして、彩樹とアリアーナ
を交互に見る。

「姫様……？ 彩ちゃん？ 彩ちゃん……あの子、
知ってるの？」

「知ってるかだつて？ 冗談じゃないっ！」

彩樹の怒りの矛先が、今度は早苗に向けられる。

「あいつは……歩美あゆみは、半年前に失踪した、オレ
の後輩だっ！」

* * *

(あの声……似てた)

朦朧とした意識の中で、アユミは考えていた。

しかし医者に飲まされた痛み止めの薬のせいだろ
うか、頭がぼんやりとして考えに集中できない。

レディ・マレイアはやや歪んだ趣味の持ち主で
あるとはいえ、闘技と、自分の闘奴を愛している
ことは確かだった。試合で怪我をすれば腕のいい
医者に診てもらえるし、食事だって栄養のあるも
のが充分に与えられている。

彼女の眼鏡にかなう容姿と才能の持ち主はほん
の一握りではあるが、それだけに闘奴としてはか
なり恵まれた環境にあるといえなくもない。夜、
ベッドの中で行われることに關しては、他の主人
たちだつて似たようなものなのだ。

だからといって、それが慰めになるわけではな
い。アユミはベッドの中で涙を流していた。

傷が痛むわけではない。今は薬が効いていて、
神経が麻痺している。しかし痛み止めの薬は、心
の痛みまで取り除いてくれるわけではない。

アユミはいつまでも涙を流し続けていた。

胸の奥が、刺すように痛い。

久しぶりに、思い出してしまったから。

自分の故郷のことを。

そしてなにより、愛しい人のことを。

* * *

あの夜。

通っていた空手道場に忘れ物をしたことを、家に帰ってから気が付いて、取りに戻った夜。

冬のことだから外はもう真っ暗だったが、極闘

流の道場の一室には明かりが灯っていた。

(よかった。まだ誰かいるみたい)

歩美はほっと胸を撫で下ろした。忘れ物は明日提出の宿題だから、既に道場の鍵を閉められていたら困ったことになるどころだった。

(……でも、こんな遅くまで誰が?)

もう、青年部の最終組の稽古も終わっている時刻のはず。大会前でもないのに、居残り稽古をしている者がいるのだろうか。

興味を引かれて、更衣室に行く前に練習場を覗いてみた。

そこには、こちらに背を向けて、一人で黙々と稽古を続ける先輩の姿があった。

「……彩樹先輩」

小さな声で、その名をつぶやく。頬がぽつと熱くなつたように感じた。

しずないさいき
静内彩樹。

歩美の二年先輩で、全国大会でも圧倒的な強さで優勝している高校女子のチャンピオンだ。

女子部の中学生、高校生の憧れの的でもある。

すごく格好いい。

すらりと背が高くて、前髪だけを目にかかるまで伸ばしたショートヘアで、獲物を狙う肉食獣のような鋭い目をしていて。

ぱつと見には精悍な美少年にしか見えない。

(やっぱり、格好いいな……)

練習場の入り口で、歩美は彩樹に見とれていた。彩樹は汗だけでサンドバッグを打ち続けている。足元に、汗が溜まっている。

(やっぱり、やる時はやる人なんだ)

後輩の女の子にちよっかいを出すのが好きで、かなりエッチで、けっこういい加減な性格に見えるけれど。

やっぱり、陰ではこれだけの稽古を積んでいる。陰口を叩く者も多いが、あの実力はなんの苦勞もせずに才能だけで手に入れたものではないのだ。

誰もいない道場でただ一人、一瞬も休まずに汗を流し続けている。それがどれほど強い意志を必要とすることか、歩美にはよくわかっていた。仲間がいれば辛い稽古にも耐えられるが、一人となるとどうしても楽をしたくなってしまふのだ。

(……はぁ……素敵……)

思わず、溜息が出てしまふ。

「ん？ 歩美、いたのか？」

突然振り返った彩樹に名前を呼ばれて、歩美は飛び上がりそうになった。ずっとこちらに背を向けていたはずなのに、どうしてわかったのだろう。やっぱりすごい人だ。

「あ、あの……忘れ物を取りに来て……」

「ちようどいい、付き合えよ」

「え？ あ……は、はいっ！」

歩美は大きくうなずいた。

本当は、早く家に帰って宿題をしなければならなかったけれど、彩樹にマンツーマンで稽古をつけてもらうことの方が大切だ。宿題なんて、明日の朝大急ぎで友達のを写せばいい。

(うわぁ……夢みたい。なんだかドキドキする)

誰もいない夜の道場で、彩樹と二人つきり。

彩樹に直に稽古を付けてもらえるのはもちろん嬉しいし、ひよっとしたら稽古の後、なにか、こう、素敵な展開になるかもしれない。

彩樹が同性愛者で、しかも見境のない性格であることは有名な話だ。歩美はまだその毒牙にかかったことはないが、『犠牲者』から聞いた話ではものすごいテクニシャンで、これまで経験したことのないような気持ちのいいことをされるといふ。まだ経験のない歩美も、実は少し期待していた。

とはいえ、慌てて空手着に着替える時に今日の

パンツがすぐ子供っぽいことに気が付いて、少々落ち込んだのだが。

「やっぱ、サンドバッグ相手じゃ面白くないからな」

着替えた歩美が練習場に戻ると、彩樹が笑っていた。

「……あの、手加減して……くださいね」

歩美は恐る恐るお願いする。たとえ約束相手だって、彩樹が本気を出したら歩美なんて大怪我しかねない。自由組手となればなおさらだ。

「ばーか。手加減して強くなれるかよ」

「……うう、怖いですう」

口では弱気なことを言いながらも、歩美は拳を構える。実際のところ、こうした稽古で彩樹が本気を出さないことはわかっていて。プロ棋士の指導暮のように、相手よりも少しだけ上の力で、正しい形で攻防を行えるように指導してくれるのだ。だから、彩樹との組手は楽しかった。

それぞれの局面でどんな攻撃をすればよいか、自分のどこに隙があるのか、口ではなにも言わな

いの手に取るようにわかってくる。

組手を続けていくうちに、彩樹は少しずつスピードを上げていく。知らず知らずのうちにそれに引きずられて、こちらも今までよりも速く動けるようになっていく。

普段の、ほんの二、三分の組手でも得るものは多い。しかも今夜は、好きなだけ彩樹を独り占めできるのだ。

五分。十分。

汗だくになった歩美が動けなくなるまで、組手は続けられた。脚をもつれさせて床に座り込んだ歩美の肩に、彩樹の手が置かれる。

「見かけによらず、なかなか頑張るな。お前」

「え……へへ……」

彩樹に褒められることがたまらなく嬉しい。もつともつと頑張れる、と。そんな気にさせられる。

「ご褒美に、いいものを見せてやるよ」

「え？」

彩樹は、サンドバッグの方へと歩いていった。

「注意して見るのは、足首と膝、それから腰と手首の使い方だ。よく見るよ」

サンドバッグの前に立って、拳を一度胸の高さに構える。それから少しだけ腕を下げて、同時に右足を踏み出した。

ドオソツ！

静まりかえった道場に重い音が響く。窓ガラスがびりびりと震えた。

彩樹の拳を打ち込まれた大きなサンドバッグが、折れ曲がって天井近くまで跳ね上がる。

先刻、彩樹が一人で稽古していた時とはまるで違う突きだった。

「……衝つひ？」

「歩美は目が良さそうだから、だいたい見えたり？ 暇な時に練習しておけよ。役に立つから」

衝。それは中国拳法の発勁にも似た、極闘流独特の突きだ。極めれば、女子の力でも大の男を一撃で倒せるといふ。

これほど間近で、見やすい角度で、ゆっくりとした動作で衝を見たのは初めてだった。彩樹が歩

美のために、奥義を見せてくれたのだ。

「あ……ありがとうございます、彩樹先輩！」

「オレに感謝してるか？」

「も、もちろんです」

「じゃあ……」

彩樹が隣に戻ってくる。また、肩に手が置かれた。

「礼をしてもらおうかな」

「あ……」

顔が近付いてくる。顎に手をかけられる。

『礼』の意味は歩美にもすぐにわかった。

「こんな時間にオレと二人きりで、何もされないとは思ってないよな？」

「……はい」

ごくりと唾を飲み込んで、目を閉じる。

一瞬の後、唇に触れる柔らかな感触。

歩美にとってはファーストキスだった。

かあつと顔が熱くなる。

力強い手で肩を抱かれる。

唇を割って舌が入ってくる。

彩樹の愛撫に黙って身を委ねていた歩美だったが、空手着の帯を解かれたところではつと我に返った。

「だ、だめですっ！ 今日パンツが子供っぽくて……、あ、まだシャワーも浴びてない！ やだっ、こんな汗くさい身体で彩樹先輩に抱かれて……ああん、やだやだっ！ どうしよう！」

パンツに陥った歩美を見て、彩樹がぷつと吹き出した。

「ばーか。そこまで先走るなって。今日いきなり最後までする気はねーよ」

からかうように言っつて、歩美の髪をくしゃくしゃと撫でる。

「それとも、して欲しいのか？ 歩美はウブっぽだから、ゆっくり手順を踏んでモノにしようと思っつてただけだな」

「え？ えと、あの……」

歩美は真っ赤になつて下を向いた。

「あの、あの……」

「どっつするっ」

「……ゆっくり、少しずつ……お願ひします」

蚊の鳴くような声で歩美は言つた。

彩樹には憧れているし、期待していないわけじゃない。だけど歩美はまだ中学三年生だし、キスだつて初めてなのに、いっぺんにこれ以上いると『初めてのこと』をされたら、目を回してしまう。それに、この心地よいドキドキをもっと長く楽しんでもいたい。

「じゃ、とりあえず今日は胸までな」

「は……はい」

また彩樹の手が顎に当てられて、上を向かされる。また唇が重なる。

顎を離れた彩樹の手は、歩美の道着の上を脱がし、汗で濡れたＴシャツの裾をまくり上げていく。

「ん……ふうん……」

胸の上までＴシャツをめくられて、ブラジャーのホックを外される。また、恥ずかしさに耐えられなくなつてくる。

「せ、せめてシャワーを……」

「いいじゃん、そんなの後で。オレ、歩美の汗の

匂いって好きだな」

「そんな……」

胸に彩樹の顔が押し付けられ、舌が触れる。

「この、程良い塩味がいいんだよ」

「……やあん」

「シャワーはこれが終わった後で一緒にな。身体

中、隅々まで洗ってやるから」

「やつ、だ、だめです！ 今日胸までです！」

「あはは」

決して発育が良いとはいえない歩美の胸を、彩樹の掌が包み込む。もう一方の乳房には、唇が押し付けられる。

「あ……ん……」

左胸に付けられたキスマークは、歩美にとっては勲章だった。

（彩樹先輩……）

シャワーを浴びて家に帰り着いた後でも、まだ動悸は治まらなかった。

あんなことや、こんなこと。いっぱい、初めての体験をしてしまった。

その上で、「続きはまた今度な。歩美の初めてはオレが予約したんだから、逃げるなよ」なんて言われてしまって。

今度っていつだろう。

土曜日とか、遅くなってもいい日の夜にまた道場へ行ってみようか。

歩美は、胸に手を当てた。

小さな胸は、大きく脈打っていた。

（やっぱり、素敵だな……）

女つたらしなのは知ってるけれど、それでもやっぱり魅力的だ。

明日、また道場で会える。

期待に心を弾ませながら、歩美はベッドに入っ

た。胸が破裂しそうで、結局宿題はできなかった。

* * *

目が醒めた時、歩美はなにか様子がおかしいと感じた。

柔らかな自分のベッドの中じゃない。ベッドに入った時と同じパジャマを着たままなのに、固い、石の床の上に寝ていた。

しかも床には、直径二メートルほどの円形に複雑な模様が描かれている。それはまるで、ファンタジーRPGに出てくる魔法陣のように見えた。

「……なに、これ」

身体を起こすと、金属が擦れ合う音がした。その時になってようやく気付いた。手首が短い鎖でつながれている。

「……なんなの、これ？」

「目が覚めたかい？」

突然の声に、はっと顔を上げる。目の前に、三十歳前後と思われる黒い服の女性が立っていた。

癪に障る笑みを浮かべて、鋭い目でこちらを見下ろしている。

「……なんですか、これ。いったい、ここ、どこ？」

歩美は相手をきつと睨みつける。

「うん、いいね。顔に似合わず気が強い。これなら、すぐにでも使えそうね」

「ちよっと！」

立ち上がって掴みかかろうとした歩美は、いきなり弾き飛ばされた。目の前の女性はなにもしていないのに、まるで見えない壁があるかのようにバランスを崩して転んだ拍子に、したたかに頭をぶつけてしまう。

「気が強いのはけっこうだけど、立場をわきまえなさい。お前は、奴隷なんだからね」

「奴隷……って？」

痛みに顔をしかめながら、歩美は顔を上げる。

もう、わけがわからない。

「一番初めに、ちゃんと知っておくべきだね。主人に逆らったり、逃げようとしたらどうなるのか」

その言葉と同時に、突然周囲の景色が一変した。薄暗い地下室のようなところにいたはずなのに、屋外の、塀に囲まれた中庭のような場所になって

いる。

赤土の地面。その中央に高さ三メートル弱の、電信柱よりもやや細い柱が立っていて、歩美よりも二、三歳年上と思われる女性が、全裸で縛り付けられていた。

「な……」

よく見れば、その女性は身体中傷だらけだった。怯えた瞳でこちらを見ている。

「あの娘はね、売られていった先で逃げようとして掴まったのさ。逃げられるはずがないのに」

黒服の女性が、歩美の肩に手を置いて言う。

「よく憶えておくがいい。逃亡を凶った奴隷の運命がどうなるのか」

パチンと、指を鳴らす。

次の瞬間

「つつ！ いやあああ つつ！」

悲鳴を上げたのは、縛られていた少女ではなくて歩美だった。その少女には、もう悲鳴を上げることはできなかった。

頭が、風船のように破裂して。

周囲に紅い飛沫が散った。

* * *

「つまり……」

詳しく説明されたのは、屋敷に戻ってからだった。シルラートが、珍しく真面目な表情で言う。

「闘奴の少女たちには、戦争の捕虜とか、売られてきたとかばかりじゃないんだ。もちろん非合法なんだが、遠い国からさらってくる例がある。力のある魔法使いであれば、造作もないことだな」

「……じゃあ」

「それをさらに進めた連中がいるらしい。公にはされていない、異世界への転移魔法を手に入れて、サイキたちの世界から……な」

「そんな……」

早苗と一姫の顔が蒼白になる。

アリアーナはなにも言わずにいつものように無表情で、彩樹は恐ろしい目をして表情を強張らせている。

「異世界から連れてきた者は、この世界では優れた能力を示す場合が多い。しかも、サイキという前例がある。よく知らなければ、サイキの世界の娘はみんな同じ能力を持っていると考えるかもしれない」

「それで、彩ちゃんの後輩のあの子をさらってきたの？ いったい誰が……」

「あの子の所有者は、マレイア伯爵夫人という闘技マニアの貴族だ。実際にさらってきたのは、また別な裏稼業の魔術師なのだろうが……」

* * *

その後の記憶は断片的にしか残っていない。あまり思い出したくないことばかりだ。

魔法で異世界に連れてこられて、闘奴として売られる そんな非現実的な状況が飲み込めるまでには、ずいぶん時間がかかった。

これは全て夢で、目が覚めたら自分のベッドの中にいる 何度そう思ったことだろう。だが、

現実には現実だった。

売られる前にも一度、同じような境遇の少女と無理やり闘わせられた。買い手に力を見てもらうため、ということだった。その試合の内容は憶えていない。勝ったのは確かだが。

続いて、鎖につながれて奴隷市場へ連れて行かれた。そこで歩美に目を付けたのが、レディ・マレイアだった。

「この子が、先刻の試合に出てた子ね。気に入ったわ」

「そう言っていただけだと思っていましたよ、レディ・マレイア」

どうやら、歩美をさらってきた女性とは以前からの知り合いだったらしい。お得意様、ということだろう。

「試合になるとあんなに強いのに、この怯えた目。そそるじゃない？」

歩美の顔を乱暴に掴んで、舌なめずりするように言う。

「身体を見せてもらえる？」

「ええ、もちろん」

いきなり、服を剥ぎ取られた。人前で全裸にさせられて、歩美は小さく悲鳴を上げる。手で隠そうにも、鎖で縛られていて自由に動けない。

「肌は綺麗ね」

レディ・マレイアの手は、なんの遠慮もなしに歩美の身体を撫でまわす。

「素敵ね。これは掘り出し物だわ」

「ではお買い上げ頂けますか？」

「もちろん。ねえ、どこで見つけてきたの？ こんな子供なのに、ちゃんとした闘技の訓練を受けているみたいじゃない？」

「ええ、まあ。ただ、仕入れルートにつきましては、あまり大っぴらにできないもので」

「でしょうね。いいわ、わたくしはなにも知らなかったことにするから」

そうして、歩美はレディ・マレイアの所有物となった。

わけもわからないまま、買われていって。

わけもわからないまま、凌辱されて。

それでようやく、女闘奴の役目が闘うことばかりではないと知った。

それ以降の記憶は、順序立てて思い出すことはできない。

同じことの繰り返しだ。

歩美の意志とは無関係に、闘技場へ引き出されて闘わせられて。

夜は先輩の闘奴やレディ・マレイアに弄ばれて絶望的な毎日だった。

それでも主人に逆らうこと、逃げることはできなかった。最初に見た、あの逃亡を図った闘奴の最後が目に焼き付いていた。

同じようになりたくなければ、耐えるしかない。この境遇に耐えて、闘い続けるしかなかった。

ここに連れて来られてから、どれくらい経ったのだろう。

もう、時間の感覚もない。

毎日毎日、死の恐怖に怯えながら稽古をし、闘うだけだ。

「でも……もう……限界だよ。耐えられない

よ……」

歩美は、ベッドの中で泣き続けていた。
痛い。

痛み止めはまだ効いているけれど、薬では抑えることのできない胸の痛み。

胸の奥が、刺すように痛い。

久しぶりに、思い出してしまったから。

自分の故郷のことを。

そしてなにより、愛しい人のことを。

夕食の後、メイドたちを下がらせて全員が居間に集まっていた。

くつろいでいるという雰囲気ではない。

特に彩樹が、全身から危険な怒りのオーラを発していた。彩樹の反応が怖くて、早苗も一姫も口をきけずにいる。

「……事情はわかった。だったら、なぜさっさと助けない？」

重い口調で彩樹が言った。アリアーナを睨みつけている。

「こちらにもいろいろと事情というものがある。調べなければならぬことも多い」

今にも怒りを爆発させそうな彩樹の前に、アリアーナの口調はいつも通りだ。

「……歩美をそのままに、なにも気付いていない振りをしておいて、黒幕を探っている……ってわけか？」

「……そつだ」

そう答えるのと同時に、彩樹の拳がアリアーナの顔に叩きつけられた。

アリアーナが倒れるよりも早く、顔と腹に連続で突きを叩き込む。さらに、鳩尾に前蹴りが突き刺さった。

糸の切れた操り人形のように、アリアーナが倒れる。顔を歪めた苦悶の表情で、食べたばかりの夕食が胃液に混じって口から溢れ出す。

彩樹が、冷たい瞳で見下ろしていた。

「……あ、彩ちゃんっ！」

「彩樹さんっ！」

早苗と一姫の叫びも聞こえていないようだ。身体を痙攣させて嘔吐し続けているアリアーナの傍らにしゃがみ、乱暴に髪を掴んで、絨毯を汚している吐瀉物の上に顔を押し付ける。

「歩美が、毎日をどんな思いで生きているか。殴られることの痛み、恐怖。自分の身体で味わってみるよ！ 女王として、なにひとつ不自由ない暮らしをしているお前にはわからんだろ！」

「彩ちゃん、やめ……っ」

背後から止めに入ろうとした早苗は、いきなり裏拳で殴られた。倒れたところを、シルラートが助け起こしてくれる。

「シルラート様、彩ちゃんを止めて！」

早苗は叫んだ。この場で、腕力で彩樹に対抗できるのは一人しかない。しかしシルラートは首を左右に振った。

「サイキが怒るのは予想していた。彼女の立場なら当然のことだ」

早苗を立たせ、一姫も促して居間を出ようとする。

「我々はここにいない方がいい。あとは二人の問題だ」

「だつてっ！ 姫様、殺されちゃうよ！」

怒りに身を任せている彩樹は、ひどく危険な存在だ。付き合いの長い早苗はよくわかつてい

る。彩樹は時々自分の感情を抑えられなくなつて、衝動のままに暴力を振るつてしまう。その気になれば素手で人を殺す力を持った彩樹が、である。

しかしシルラートは、もう一度彩樹を止めよう

とする早苗をしっかりと掴まえた。

「ここにいない方がいい。アリアーナは大丈夫だから」

続けて、小さな声で耳元でささやく。

「君らがここにいと、サイキは怒りを収められない」

早苗は仕方なく、シルラートの言葉に従った。

* * *

早苗たちが出ていってアリアーナと二人きりになると、彩樹はソファにどっかと腰を下ろした。

相変わらずの怒りの表情で、横たわるアリアーナを見下ろしている。

「う……く……」

苦しそくに呻き声を漏らしながらも、アリアーナが身体を起こそうとする。震える身体で立ち上がろうとして、バランスを崩してまた床に倒れた。片手で口を押さえる。大量の血が混じって赤黒く染まった胃液が、指の隙間から溢れ出す。

それでも腕の力で這うように進んで、彩樹が座っているソファに這い上がると、クッションに寄りかかって大きく息をついた。

苦しそうに荒い息をしながら、彩樹に顔を向ける。額に脂汗が滲んで、口の周りは血と吐瀉物で汚れているが、表情は意外と落ち着いていた。

それでも、息をする度に微かに顔が歪んでいる。深呼吸することができずに、浅い呼吸を繰り返している。

おそらく、殴られた肋骨が折れているのだろう。

「……謝らねーぞ」

アリアーナから目を逸らすと、彩樹はぽつりと言った。

「……謝らなければならぬのは……、わたしの方……なのだろうな」

数秒の間の後、ゆっくりと一語ずつ区切るようにアリアーナが応える。声を出すのも苦痛らしい。彩樹は立ち上がると、アリアーナの前に立った。

「……そうだな。だけど、オレにじゃない」

低い声でそう答えて、ぎゅっと拳を握る。

そのまま黙って、アリアーナを見下ろしていた。室内がしんと静まりかえる。アリアーナの苦しそうな呼吸だけが聞こえてくる。

やがて、彩樹はゆっくりとその場に膝をついた。アリアーナのドレスをぎゅっと握って、しがみつくようにして膝のあたりに顔を埋める。

「サイキ……」

感情のこもらない紫の瞳が、自分に縋りついている彩樹を見つめる。彩樹の肩が、小刻みに震えている。

「……なあ、頼むよ。あいつを助けてやってくれよ」

それは、涙声だった。

「……あんなこと、できる奴じゃないんだ。あんな奴じゃないんだよ。どうして歩美があんな悲しい目をしなきゃならないんだ。あいつはもつと……すごく、可愛い顔して笑うんだ。まだぜんぜんウブで、甘えん坊でさ……」

アリアーナはじつと彩樹を見つめていた。彩樹が顔を押し付けている膝のあたりが、熱く濡れて

いた。

「こんなところ……あいつがいていい場所じゃない。あいつがいるべき場所じゃないんだ。……頼むよ、なあ……頼む」

「サイキが……助ければいい」

その言葉に、彩樹の肩の震えがぴたりと止まった。

「……いいのか？」

涙で濡れた顔を上げる。

「オレのやり方でやるぞ。いいのか？」

「そのためにサイキを連れてきた」

アリアーナはゆっくりと、しかし大きくうなずいた。

「歩美の……次の試合は？」

「今回はしばらく間があるだろう。少なくとも、怪我が治るまでは。すぐ数日後、ということはいはずだ」

「……ならいい」

彩樹は勢いよく立ち上がった。手の甲で涙を拭ってアリアーナを見ると、彼女も汚れた口の周

りを拭いている。

「……やせ我慢しやがって。まだ立ち上がれないくらい苦しいんだろ？」

「そうだ。サイキに頼める義理ではないのかもしれんが、寝室まで連れて行ってはくれないか？」

「ふん」

彩樹は乱暴にアリアーナを肩に担ぎ上げた。そのまま軽々とアリアーナの寝室まで歩いていき、ベッドの上に放り投げる。

「……医者を呼ぶか？ 歩美を助ける前に死なれちゃ困るからな」

「いや、大丈夫だ」

アリアーナの口調は相変わらずだったが、横になったためかいくらか楽そうに呼吸をしている。

しばらくベッドの脇に立ってそんな様子を見下ろしていた彩樹の口元に、微かな笑みが浮かんだ。おもむろにベッドに上がると、アリアーナの上のしかかった。

一瞬だけ戸惑いの表情を浮かべたアリアーナの胸元に手をかける。少し力を入れると、薄い絹の

生地はあっさり裂けた。

おそらくはかなり上等なものであろうドレスを簡単に破り捨てた彩樹は、続けて下着に手を伸ばす。たちまちのうちに、それもただの破れた布に姿を変えた。

* * *

「……いつの間？」

ふと気付くと、早苗はシルラートの寝室に連れ込まれていた。

ベッドに押し倒されて、顔中にキスの雨を降らされて、服を脱がされているところ。一瞬前まで廊下を歩いていたと思ったのに、彩樹に勝るとも劣らない早業だ。

「……って、何してるんですか！シルラート様！」

「することは一つしかないだろう。久しぶりに会って」

「こんなことしてる場合じゃないでしょお？」

早苗は抵抗する。別にシルラートと一夜を共にするのが嫌なわけではない。が、彩樹とアリアーナが大変なことになっていいるというのに、それどころではない。

「姫様と彩ちゃん、あのままじゃ……」

「心配ない」

「でも……彩ちゃんがついているからこそ、危ない気がするんだけど」

彩樹は時折、自分を抑えられなくなって衝動的に暴力を振るってしまうことがある。そんな時には、まったく手加減ができなくなるのだ。

あれだけ激怒している彩樹を見るのは早苗も初めてだった。ひとつ間違えば、取り返しのつかないことになりかねない。

「大丈夫だ。私を信じろ」

「でも……」

まったく心配していない様子シルラート。この自信の根拠はいつたい何なのだろう。彩樹のことは、早苗の方がずっとよく知っているはずなのに。

「後は、彼女たち二人の問題だ。こっちはこっちで楽しもうじゃないか」

「やあ……ん……もお……」

露わにされた胸に唇を押しつけられて、早苗は身悶える。この感覚は嫌いじゃない。

シルラートとのこつした関係にも、ずいぶんと慣れてきた。

彩樹には女の子同士の良さを教わって、シルラートには男の良さを教えられて。

共通点は、どちらもたまらなく気持ちいいということだった。彩樹のことはもちろん好きだけれど、シルラートも捨てがたい。

(彩ちゃんは浮気し放題なんだから。ウチだってちよつとくらい……ねえ?)

シルラートはハンサムだし、身分は高いし、なにより男だし。

彩樹と『初体験』してしまった以上、彼を拒む理由もないではないか。

「んっ……あっ、あんっ!」

シルラートが胎内に入ってくる。微かな不安と

その何倍もの悦びを感じながら、早苗は彼を受け入れていた。

* * *

全裸になると、アリアーナの肌の白さがいっそう際立っていた。

鳩尾と脇腹が赤く腫れ上がっている。

彩樹はアリアーナの上に馬乗りになると、細身な割には豊かな彼女の胸を鷲掴みにした。柔らかくなゴムボールのように変形する乳房に、爪が深々と喰い込んでいく。

「……サイキ?」

「女の鬪奴は、こーゆーこともされるんだろ?」

「自分の身体で味わってみろ……!」

このような状況でも、アリアーナは顔色ひとつ変えない。まだ傷が痛むのか額に汗が滲んではいるが、そのポーカーフェイスは相変わらずだ。

「……それで気が済むのなら、わたしは構わないが」

「……………」

彩樹は無言で、アリアーナの顔をじつと見下ろした。

そのまま数分間が過ぎる。

「……………」

しばらく経ってようやく手を放した彩樹は、舌打ちしながらアリアーナの上から降りた。ベッドの端に腰掛ける。

「少しはビビってみせろって。どんな冷静な女だってなあ、レイプされそうになったらもとり乱すもんだぞ」

「すまない。そういう感情表現は得意ではないんだ」

「それは知ってるけどよ。少しは期待するじゃないか」

彩樹はつまらなそうに小さな溜息をついた。アリアーナがゆっくりりと上体を起こす。

「……………」
「なあ、歩美のこと、いつから気付いてたんだ？」

「弁解するつもりはないが、それほど前のことで

はない。この間、夢魔騒ぎがあったろう」

「ああ」

「あれがどこから迷い込んだものか調べさせていたのだが、どうやら、わたしたち以外にもサイキたちの世界とここを行き来している者がいるらしいとわかった。ちょうど同じ頃に兄上が、奇妙な闘奴がいる、と言ってきたんだ」

「それが歩美か」

「そうだ」

アリアーナがうなずく。

「三日前、兄上に連れられて初めてこの街に来た。一目見てすぐに気がついた。あれはサイキと同じ技だ。キョクトウリユウ……とかいったか」

「当たり前だ。歩美はオレが鍛えたんだ」

「それで、サイキたちを呼んだ」

「……………」
「そうか」

彩樹はぼんやりと天井を見上げた。アリアーナを殴ったのは、少し早まったかもしれない。別に、知っていて放っておいたわけではないのだ。とはいえ、素直に謝る気になれないのも事実だった。

立ち上がった、ベッドの脇に置いてあった水差しを手に取った。一口水を飲んで、それからアリアーナにグラスを差し出す。アリアーナはゆっくりと水を口に含んだ。

彩樹は腕組みして壁に寄りかかり、そんな様子を見つめていた。アリアーナは全裸のままなのに、羞恥心を感じている様子はこれっぽっちもない。もっともそれは今に始まったことではなく、普段から彩樹の目を気にせずに水浴びをしたりしている。

「この間の夢魔といえは……」

ふと思い出して、彩樹はつぶやいた。

「オレの前に現れた夢魔は、翠の……死んだ姉の姿をしていた」

「ほう？」

相変わらず無表情なまま、しかし幾分興味ありげな口調でアリアーナがこちらを見る。彩樹は一歩近付いた。

ゆっくりと手を伸ばし、アリアーナの喉に触れる。そのまま軽く押して、仰向けに押し倒した。

「次に、お前の姿になった。だからオレは殺そうとしたんだ。こうやって、な」

少しずつ、体重をかけていく。アリアーナの細い首を締めつける手に力を込める。

「本気で、お前を殺すつもりだった。こうして首をへし折れば、どれだけ気持ちがいいだろう、って」

「どうして、わたしではないと気が付いた？」

「本気で怯えてたから、さ」

彩樹は手を放した。白い首に赤く指の痕が残っている。相当の力が入っていた証拠だ。

「死ぬ直前まで、オレはそれがお前だと信じていた。信じていて、それでも止めなかった。自分の命が危なくなつて、夢魔も慌てたんだろう。本気で怯え出したんで、何かおかしいと気がついた。本物のお前なら、首を折られるその瞬間まで顔色ひとつ変えないだろうにな」

彩樹は手近にあった椅子を引き寄せると、逆向きに座った。背もたれに肘をつけて顎を乗せる。

「なあ、どうすればそこまでポーカーフェイスに

なれるんだ？」

「……………まだ、子供の頃のことだ」

アリアーナが口を開くまでには、しばらくの間があった。

「小さい頃は、普通の子供だった……………と思う。好きなものは好き、楽しいことは楽しい、素直にそう言えた。その頃……………好きな男の子がいたんだ」

そこで一旦言葉を切つて、反応を確かめるようにこちらを見た。しかし彩樹は表情を変えずに聞いていた。

「……………しかしやがて、その想いを人前で口にはいけないうらんだと知った。誰かを特別扱いしてはいけない。考えていることを他人に知られてはいけない。自分が、そういう立場にいると知ってしまった」

彩樹も微かにうなずいた。先王の三人の子、その誰が世継ぎになるかについて、ずいぶん前から王宮内でも様々な争いがあったことは知っている。子供たちの意志とは無関係の、大人たちの争いだ。「一番好きな人に、その想いを伝えてはいけない

んだ、と。気持ちを知られてはいけないうらんだ、とだから、感情を表に出さないように気を付けてきた」

「向こうはとうにお前の気持ちなんか知っていると思っただけだな」

「おそらくは。しかし、他人に知られるのはまずかろう」

「なるほどね。そうして、この鉄面皮女の出来上がり、か」

小さく肩をすくめて彩樹は立ち上がった。一度、大きく伸びをしてから寝室を出ていこうとする。

その背中に、アリアーナの声が向けられる。

「私も知りたいものだな」

「ん？」

ドアノブに手をかけて、彩樹が振り返る。

「サイキは、どうしてそのような性格になった？」

二、三度、瞬きをして。

彩樹は口元に微かな笑みを浮かべる。

「……………知ってるくせに。玲子さんから聞いたんだ

る？」

「気付いていたのか。だが、そのことであの者を責めないで欲しい」

「別にどうでもいいさ、今さら」

それだけ答えて、彩樹はアリーナの寝室を後にした。

歩美にとっては、久しぶりの試合だった。

これだけ試合間隔が空いたのは初めてではないだろうか。それだけ、前の試合による負傷がひどかったということでもある。

(……結局、闘い続けるしかないんだよね)

半ば諦めの気持ちで、そう考える。

他に選択肢はない。生きていたければ、闘うしかない。

一度は死を選びそうになったあの瞬間、結局自分分は生きることを選択してしまったのだから。

今日の試合の相手、名前はまだ聞いていないがこれがデビュー戦だという。きっと向こうも緊張していることだろう。

それにしても珍しいことだった。新人の相手をするのは、普通はもつと格下の闘奴の役目である。華奢な身体に似合わぬ実力を認められ、人気も急上昇中の歩美に回ってくる仕事ではない。

考えられることは二つ。

その新人が、周囲も認めるかなりの実力を持っている。例えば、戦争で捕虜になった名のある戦士など。の場合。

もう一つは、主人が相当な有力者で、自分のお気に入り新人に華々しいデビュー戦を飾らせた。いと考えている場合。

もっとも後者の場合には、実績や知名度は十分であつても、実力的には既にピークを過ぎたベテランが相手をすることが多い。現在登り坂にある者が相手では、新人には荷が重いだろう。

いずれにせよ、歩美にとってはいいことかもしれない。相手がどんな経歴を持っているにせよ、闘技場での闘いに慣れている分こちらが有利だ。たとえ戦場での実戦経験があつたとしても、観客に囲まれた闘技場の雰囲気はまた違ったものはずだ。

(向こうが勝手を掴めずにいるうちに、一気に決める……: しかないよね)

どんな事情で闘奴になったのかは知らないが、同情している余裕などない。自分が勝つことだけ

で精一杯だ。

だからむしろ、相手が手強い上位の闘奴ではなくて新人だというのは、ありがたいと思うべきだ。そう考えて、歩美は闘技場へ入った。

対戦相手は既に入場していた。格下なのだから当然だ。

しかし、そこで自分の目を疑った。

信じられない。

信じられるわけがない。

それは自分がよく知っている顔であり、決してここにいるはずのない顔だった。

二、三度、瞬きを繰り返す。

見間違いではない。目の前の人物の顔はそのままだ。

日本人の女性としては長身で、無駄な脂肪などまったくなく、まったくないと思えるくらいに痩せている。髪は短く、前髪だけが目を隠すくらいに伸ばされている。

それでも隠しきれない鋭い瞳。唇の端を上げるやや皮肉めいた笑み。

「……彩樹……先輩？」

こうして目の当たりにしても、まだ信じられない。半信半疑でその名をつぶやいた。

忘れるはずがない。見間違えるはずがない。

密かに想いを寄せていた、憧れの先輩を。

だけど、どうしてこんなところにいるのだろう。

そこで、はっと気付いた。

「……先輩も、さらわれてきたんですか？」

歩美と同じように。

彩樹がここにいる理由なんて、他に考えられないではないか。

しかし目の前の相手は、にやっと笑って小さく肩をすくめた。

「なんの話だ？ お前、前にどこかで会ったか？」

その声。

そのぶつきらぼうな物言い。

間違いない。なのに。

馬鹿な。そんな馬鹿な。

彩樹は、嘘をついている。でも、どうして。

わからない。

わからない。

獲物を狙う肉食獣のような、あの鋭い瞳。半年前と、最後に会った時となにも変わっていない。

なのに、私のことなんて知らないと言う。

どうして

歩美の困惑をよそに、彩樹はにやにやと笑って言った。

「お前、結構な人気者だそうじゃないか。オレの連れがな、お前のことを気に入ったとき。オレに勝てたら、買い取って自由の身にしてやるって

よ

「え？」

一瞬、言われた意味が分からなかった。

今、なんて言った？

自由の身に？

自由……！

「自由、に……？」

「あくまでも、勝てたら……だ」

その口調は言外に、「過てつこない」と歩美を

嘲っていた。

歩美は混乱していた。

一体、どういうことだろう。

彩樹はやっぱり、助けに来てくれたのだろうか。でも、どうやって。

ここは、彩樹が住む世界とはまるで別の世界なのに。

それでも

歩美は、ここにいる。彩樹が来られない理由があるだろうか。いや、まさか。

それにしても、あの台詞はどういう意味だろう。「オレに勝てたら、自由の身にしてやる」だなんて。

歩美が、彩樹に勝てるわけがないではないか。

まさか、わざと負けてくれるつもりだろうか。

いや、そんなはずがない。あの彩樹に限って。

彩樹は歩美を助けに来てくれた、ということだけであれば「もしかしたら」と思わなくもない。

しかし、勝負に関してはこれ以上はないというくらいに厳しい彩樹が、わざと負けるなどあり得な

い。

では、本気で闘ったらその結果は？

考えるまでもない。あの静内彩樹に勝てる道理などあるはずがない。

……いや。

本当にそうだろうか。

ひよっとしたら、ひよっとするのではないだろうか。

歩美はこの半年間、無数の『実戦』をくぐり抜けてここにいる。「一日の実戦は百日の稽古に勝る」と言うのではないか。半年前の歩美とは比較にならない力をつけているはずだ。

彩樹に勝てる可能性だってあるかもしれない。いや。勝たなければならぬのだ。

彩樹はなんて言った？「オレに勝てたら、自由の身にしてやる」と。

勝たなければならぬ。歩美が自由になるためには、それしかない。

彩樹に勝つしか。

(彩樹先輩に、勝つ?)

そんな無茶なこと、と思わなくもない。それでも、やってみるしかない。

気持ちを落ち着かせるために、大きく深呼吸した。そして、作戦を考える。

まともに正面から殴り合って勝てるはずがない。長身の彩樹と小柄な歩美とは、リーチもパワーも違いすぎる。

ならば、向こうに先に仕掛けさせてカウンターを狙うべきか。

それも難しそうだ。彩樹の打撃のスピードはよく憶えている。半年前の歩美では、目で捉えることすらできなかった。今の歩美が当時より格段に強くなっているとしても、自信はない。

では、どうしたらいい？

試合開始と同時に、歩美はゆっくりと前に出た。一步、また一步。じわじわと間合いを詰めていく。

間もなく、手足の長い彩樹の間合いに入る。

狙うのはその瞬間だ。

彩樹の性格から考えて、自分の間合いに入った

瞬間に仕掛けてくる可能性が高い。だから、その一瞬前に行動を起こすのだ。

そこでは歩美の間合いにはまだ遠い。しかし、彩樹の方から距離を詰めてきてくれる。そこで素速くもう半歩前に出れば、彩樹の攻撃のタイミングを外してこちらの間合いに入ることができる。

彩樹の間合いを正確に計る。

あと五十センチ、三十センチ……。

彩樹が動いた。一瞬早く、歩美は行動を起こしていた。

脚の前に大きく踏み出し、低い姿勢から拳を突き出す。

彩樹の拳がこめかみを掠めていく。

確かな手応えが伝わってきた。歩美の拳が、彩樹の鳩尾に突き刺さっていた。

信じられない。だけど、それが現実。

彩樹の身体がくの字に曲がる。

このチャンス逃すわけにはいかない。ここで決められなければ勝機はない。

下がった頭に残り続けて拳を叩き込んだ。フック気

味に、顎とこめかみを狙って連打。

彩樹がよろける。バランスを取るために踏み出した足に、ローキックを叩きつける。

膝が落ちかけたところに、脇腹へ中段の回し蹴り。

蹴り足を地面に着けずに、続けて鳩尾への前蹴り。

いずれもクリーンヒットする。

効いている。確かに効いている。

彩樹だって人間だ。先手を取られてまともに攻撃をくらえばダメージは受ける。

歩美はぎりぎりまで踏み込んで、真下からアッパーカット風に拳を突き上げた。顎を直撃し、彩樹の身体が仰け反る。

がら空きになったボディに、中段突きの連打。

さらに続けて、歩美の身体が独楽のように回転する。上段の後ろ回し蹴り。

彩樹の身体は大きくよろめいた。まだ倒れはしないが、相当なダメージがありそうだった。

(ここ……っ！)

とどめを刺すために、歩美は飛び込んだ。
半年前、彩樹に教わった技。

こちらに来てからも、密かに練習し続けていた。
彩樹を倒すとしたら、これしかない。

衝

全体重を乗せた必倒必殺の突きを、彩樹の腹に
叩きつけた……はずだった。

「……え？」

しかし。

あと数ミリのところで、拳は彩樹の身体に届い
ていなかった。

手首を掴まれていた。彩樹の手に。

彩樹がにやりと笑った。その唇の端に血が滲ん
でいた。

「残念。もうひと息だったな」

はっと我に返り、離れようとする。しかし彩樹
の手にしつかりと手首を掴まれて、振りほどくこ
とができない。

「でも、強くなったよ、歩美」

「っ！」

空いている方の彩樹の手が、伸ばされた肘に叩
きつけられる。

激痛が走った。

一瞬、意識が遠くなる。

ほんのコンマ何秒かのその隙が命取りだった。

(衝)

低い姿勢から、彩樹の拳が叩きつけられる。

衝撃が身体を貫いた。まるで、腹に太い杭でも

打ち込まれたかのようなだった。

意識が粉々に砕け散る。

歩美の身体はその場に崩れ落ちた。

目を覚ますと、歩美は自分の寝台の中にいた。外が明るい。もう、陽はずいぶん高く昇っているようだ。怪我のせいで寝過ぎしてしまったらしい。

右腕は、肘を中心に熱く包帯が巻かれていて、少しでも動かそうとするとずきずきと痛んだ。

涙が滲んでくる。だけどそれは、傷の痛みのためではない。

(彩樹先輩……)

やっぱり、勝てなかった。

彩樹がわざと歩美に攻めさせているのにも気付かず、調子に乗って思い上がってしまった。

自分の弱さが情けなくて、そして悔しかった。自由になるチャンスを掴み取るだけの力がなかった。

「あ、アユミ。気が付いた？」

「アイリア……」

声をかけてきたのは、同じ頃にレディ・マレイ

アに買われてきた少女だった。歳も近いのでアユミと一番仲のいい闘奴仲間だ。

「大丈夫？ 起きれる？ だったらちよつと来て。大変なことになってるの！」

「え？」

そう言われてみると、なにやら外が騒がしい。いったい、どうしたのだろう。

「外で、いったい何をやっているの？」

「よそ者との練習試合。一人で全員を倒してみせる、ってレディ・マレイアに喧嘩を売った奴がいるらしいんだ。そいつ、本当に強いんだよ。もう、シエスカ様もナイアもやられてる」

「……まさか」

まさか、そんなことが。

しかし、他に考えられない。その「よそ者」は、歩美がよく知っている人物のはずだった。

* * *

歩美との試合の翌日、アリアーナ、彩樹、早苗、

一姫の四人はレディ・マレイアの屋敷を訪れていた。

女の子ばかりでは不審がられるということで、シルラートの部下が二人、護衛という形で同行している。さらにアリアーナは有名人なので、髪をアップにして薄いヴェールで顔を隠していた。お忍びでやってきた貴族の娘、といった出で立ちだ。訪問の理由は決まっている。歩美を買い取ろうというのだ。

「うちのアユミを譲ってほしいと？ あの子の闘いぶりが気に入りました？」

「ええ、そうです」

アリアーナが応える。

彩樹は相手に喧嘩でも売っているかのような目つきをしていて、早苗と一姫は緊張して事の成り行きを見守っている。

「それにしても、わたくしの言い値で構わないとは気前のよろしいこと」

こちらとしては文句なしのいい条件を提示したつもりだった。なにしろスポンサーはアリアーナ

である。金に糸目をつける理由はない。

しかしレディ・マレイアは、首を縦には振らなかった。

「残念ですが、あの子を手放すつもりはありませんの」

「ええっ？」

大声を上げたのは一姫だ。他の者は一樣に、それを予想していたかのような顔をしている。

「わたくしは別に、お金儲けのために闘奴を集めているわけではありませんもの。純粹に、闘技が好きただけですわ」

優雅に扇を口元に当てて「ホホホ……」と笑う。

「幸い、金銭には不自由のない生活ですから。滅多に手に入らない、見所のある闘奴を手放すわけがありませんでしょう？ それにあの子は、闘技場以外でも私を楽しませてくれますものね」

早苗は、彩樹のこめかみに青筋が浮いていることに気付いた。背中に冷たい汗が流れ落ちる。今の台詞は危険だった。彩樹がもう、今にも切れる寸前だ。

しかし、レディ・マレイアが歩美を手放さないのは予想していたことでもあった。

お気に入りであるというのも事実だろうが、それ以上に歩美は、重犯罪の生き証人である。

誘拐してきた娘を奴隷として売るのはもちろん犯罪だし、なにより転移魔法は、この世界では禁じられた技なのだ。王と主席宮廷魔術師の許可なくそれを行った者は、厳しく罰せられるという。

レディ・マレイアは詳しい事情は知らないかもしれないが、それでも歩美が「非合法的な」手段で売られてきたことは察しているはずだ。あるいは、誘拐犯から直に口止めされているかもしれない。

だから、歩美を手放そうとしないのは予想できたことだった。「アユミを買いたい」というのは、単にこの屋敷に上がり込むための口実でしかない。

「純粹に闘技が好き、ねえ……」

それまで怖い顔をして黙っていた彩樹が、急に態度を変えた。皮肉めいた笑みを浮かべて挑発するよつに言っ。

「あんな雑魚ザコ闘奴ばかり数を集めて、どうしようっていうんだか」

その一言で、レディ・マレイアの表情が強張る。「聞き捨てならないことを言っわね。昨日アユミに勝ったくらいでいい気になっているの？ 私のところには、闘技場のチャンピオンもいるのよ」「チャンピオンだろうとなんだらうと、雑魚には変わりないさ。なんならここに連れてきてみるよ。お前が飼ってる雑魚なんか、オレ一人で全員片づけてやるよ」

「っ」

はつきりと怒りの形相を浮かべてレディ・マレイアが立ち上がる。

「その言葉、一言はないでしょうね？ たとえ途中で死んだとしても、全員とやってもらおうわよ！」

「昼飯前の軽い運動、ってところかな」

彩樹はこれ見よがしに欠伸さえしてみせた。偉そうで人を馬鹿にした態度を取らせれば、彩樹の右に出る者は少ない。プライドの高そうなレ

デイ・マレイアを激怒させるには充分すぎたお釣りがくる。

「外に出なさい。訓練用の小さな闘技場があるわ」

「オレが勝ったら、歩美はもらってくぞ」

「では、あたくしが勝ったらお前は私のものね。

楽しみだわ。いつまでそんな大きな態度でいられるかしら」

レディ・マレイアが大声で使用人を呼ぶ。

彩樹が立ち上がるのに合わせて、アリアーナたちも揃って席を立った。三人だけに聞こえるように小声でささやき合う。

「それにしても……全員倒すだなんて、いくら彩ちゃんでもやり過ぎじゃあ……」

「仕方あるまい。サイキが、自分のやり方でやると言っただ」

「……大丈夫ですよ。彩樹さんなら、きつとやってくれますわ」

* * *

レディ・マレイアの言う通り、広大な屋敷の敷地の一角に小さな闘技場があった。

白い砂を円形に敷き詰め、片側には小さな客席も設けられている。訓練に使用される他に、来客のためにここで試合を行うこともあるのだろう。

彩樹は普段着のまま、平然と闘技場の中央へ進んでいった。レディ・マレイアの闘奴たちもばらばらと姿を見せる。その数十七、八人といったところだろうか。まだ状況がよくわかっていないのか、戸惑いがちにこちらを見ている。

レディ・マレイアが闘奴たちに言った。

「誰でもいいわ。あいつを倒した者には褒美をあげるわよ」

「……で、最初はどうだ？」

彩樹は闘奴たちに向かって中指を立ててみせる。「シエスカ、あなたがやりなさい。遠慮はいらないわ」

「はっ！」

よく通る声とともに前に進み出たのは、大柄な、

髪の短い女性だった。

身長は彩樹よりもずっと高い。百八十センチ前後はありそうだ。太ってはいないが筋肉質で、並の女子プロレスラーなど問題にならない体格をしている。

「ふん。最初はでかいだけのウドの大木か」

彩樹が鼻を鳴らして嘲笑する。シエスカと呼ばれたその闘奴は、はつきりと怒りの表情を浮かべた。

大きな拳を胸の前で構える。

「まあ、どーして彩ちゃんってああなんだろ。レディ・マレイアはともかく、闘う相手を怒らせるのは得策じゃないと思うんだけど」

アリアーナや一姫たちだけに聞こえるように早苗がささやく。アリアーナが微かにうなずいた。

「それがサイキだから」

「といつてもねえ……」

「始めなさい！」

レディ・マレイアの高い声が響くのと同時に、シエスカが勢いよく前に飛び出して来る。その大

きな運動エネルギーを拳に乗せて、彩樹の顔面に叩きつけた。スピードはそれほどでもないが、とんでもなく重そうなパンチだ。

まともに、彩樹の顔面にヒットする。

「……え？」

見ていた早苗たちは驚いた。彩樹がかわせないようなスピードではない。無視できない体格差があるのだから、ここはスピードを活かしたヒット・アンド・アウェイで闘うべきではないだろうか。あの体格から繰り出される重いパンチを喰らえば、彩樹だって無傷ではいられまい。

しかし。

彩樹は平然と立っていた。

内出血を起こしたのか、殴られた部分が赤黒く腫れ上がってくる。それでも相手を見下したような笑みは崩さない。

「効かないなあ」

「なにをつ！」

「全然なつてない。人を殴るつてのはなあ……」

彩樹の台詞が終わる前に、シエスカがまた殴り

かかってくる。今度は彩樹も動いた。

足を一步前に踏み出して、身体をひねりながら相手のパンチを紙一重でかわし、同時にそのまま中段の突きを繰り出す。

傍目には、腕が相手の腹に突き刺さっているように見えた。

「うわぁ……いつきなり奥義だ」

「彩樹さん、素敵ーっ！」

一姫が手を叩いてはしゃぐ。

衝 奥義といいつつも、彩樹は当たり前のようにそれを使う。まともに決まれば、女の力でもガードの上から骨を叩き折り、大の男を昏倒させる威力がある技。本来ならば完璧な体勢、完璧なタイミングでなければその威力を発揮しない衝を、普通の中段突きのように自然に繰り出せるところが彩樹の強さの秘密だ。

シエスカの巨体が崩れ落ちる。口から、血の泡が吹き出した。

他の闘奴たちの間からざわめきが起きる。

「な？ 雑魚だって言ったる」

さも余裕ありげに前髪を手でかき上げて、彩樹はレディ・マレイアを見た。悔しそうに唇を噛みしめ、彩樹を睨みつける。

「……ナイア！」

「は、はい！」

呼ばれて前に進み出たのは、褐色の肌の女性だった。先程のシエスカよりはやや小柄だが、それでも彩樹より長身である。すらりとしたその身体は、シエスカよりもずいぶんと身軽そうだ。

彩樹の技を目にして警戒しているのか、長い腕でしっかりとガードを固めて、遠い間合いから拳を繰り出してくる。

ボクシングに近い動きの本格的なパンチだった。左のジャブが彩樹の顔を捉える。続けて右のストリート。そのまま前に出て、一転して今度はボディに左右のフック。一息で四発を叩き込むコンビネーションを見舞い、ぱっと距離を取ってまたガードを上げる。

それでも彩樹は、平然と薄笑いを浮かべていた。「だから、効かねえって」

一歩前に出る。たじろいだナイアが下がろうとした瞬間、彩樹が跳んでいた。

ナイアの身体が転がり、砂煙が舞い上がる。

目にもとまらない跳び蹴りだった。

一姫が跳び上がって歓声を上げる。

しかし隣に立っている早苗は、浮かない表情をしていた。

「彩ちゃん……どうしてそんな闘い方すんの？

マズイよ、それ」

「……そうだな」

「え？」

二人の深刻な雰囲気気付いた一姫が、訊ねるような目で早苗を見る。早苗はちらりと一姫に視線を送ると、また試合場を見て言った。

「必ず、最初に相手の攻撃を受けてるじゃない。

彩ちゃんなら、かわせないはずなのに」

「わざと……ですか？ どうして？」

「この間、サイキが私に言ったことを憶えているか？ 『殴られることの痛み、恐怖。自分の身体で味わってみる』と」

「え、あ……じゃあ？ まさか、そんな……」

「本気、だな。サイキは……」

アリアーナはいつもの無表情を崩さない。ただ真っ直ぐに、試合場を見つめていた。

* * *

アイリアに肩を貸してもらって闘技場へやってきた歩美が見たものは、彩樹の闘う姿だった。

そして、レディ・マレイアと仲間の闘奴たち。

見知らぬ数人の少女は、彩樹の知り合いかもしれない。

闘奴たちの約半数は、隅で横になったり力なくうずくまっている。彩樹が倒したのだろうか。

「彩樹……先輩……」

闘う彩樹の顔は、真っ赤に染まっていた。返り血ではない。彩樹自身の血だった。

血塗れで、傷だらけで。

それでも、動きにはまったく衰えが見えない。大腿骨をへし折りそうなローキックを叩き込む。

相手が大きくバランスを崩したところで彩樹が跳ぶ。ジャンプの最高点で一瞬身体を丸め、体重に伸び上がる背筋の力を加えて真上から叩きつける蹴り、飛鷹脚。ひやうめやく

どれも、懐かしい技だった。

一撃で相手は動かなくなり、試合場から運び出される。すぐ、次の相手が入る。

なんとということは無いはずの突きが、彩樹の顔面を捉えた。それでも彩樹はぐらつきもしない。

脚が跳ね上がる。ガードすら間に合わない瞬速の上段回し蹴り。

また、一撃だ。

レイ・マレイアに向かって指を立てて見せ、下品な台詞で挑発している。

まさしく、彩樹の姿だった。

「さすが、大口を叩くだけのことはあるようね」

さほど大きくもないその声に、闘奴たちがさつと左右に分かれて道を開ける。アユミは小さく息を呑んだ。

はつとするほど綺麗な女性だった。彩樹よりも

わずかに背が高く、年の頃は二十代半ば。緩いウェーブのかかった長い金髪が、陽の光を反射して黄金のように輝いている。

もちろん、歩美はその女性をよく知っていた。

この国の住人で知らぬ者はないといってもいい。

レイシア。

この二年間公式戦無敗を誇る、あの闘技場のチャンピオンだ。貴族の令嬢たちの中にあっても違和感がないほどの容姿も手伝って、人気、実力ともに文句なしのナンバーワンだった。

彩樹が微かに眉を上げ、面白そうに笑みを浮かべた。それが、強い相手と出会った時の彩樹の癖であることを歩美は知っていた。さすがに、目でレイシアの実力を見抜いたらしい。

「ようやく、楽しめそうな奴が出てきたか」

「そして、これがあなたの最後の闘いになる」

レイシアも静かな笑みを浮かべている。その表情に、相手を侮っている様子はない。歩美はレイシアの試合を何度も見たことがあるが、彼女はいつだって、どんな相手だって全力を尽くすのだ。

彩樹とどちらが強いだろう。歩美には、すぐには答えられなかった。だとしたら、連戦で疲労しているはずの彩樹が不利かもしれない。かなりのダメージを負っている様子でもある。

「理由は知らないけれど、あなたは最初の攻撃をわざと受けているようね。でも、それが命取りになる」

レイシアの台詞に、歩美は驚いた。まったく、思いもしない言葉だった。

彩樹が、わざと相手の攻撃を受けている？

だから、あんなに傷だらけ、血塗れになっているのか。

だけど、どうして？

「てめーにや無理だよ」

腫れ上がった顔で、彩樹がにやりと笑う。同時にレイシアが飛び出した。

正確に顔を捉える左右のパンチ。レイシアの言葉通り、彩樹は避ける素振りすら見せなかった。

続けてローキック。彩樹の意識がわずかに下に向いたところで、顎を狙ったフック。

彩樹の頭が大きく揺れる。

ガードががら空きになった腹に、至近距離からのボディアップの連打。そのまま間を空けずに膝蹴り。

歩美は見ていて涙が出てきた。

どうして、彩樹は相手の攻撃を受けているのだろう。レイシアの打撃は、まともに当たって平然としていられるほど生易しいものではない。

痛かった。

まるで自分が攻撃されているかのように胸が痛んだ。

レイシアの連撃は止まらない。彩樹が倒れるまで攻撃し続けるつもりだ。彼女にならそれができる。最初にいいのをもらっている以上、攻撃が途切れなければ彩樹は反撃できない。

女子としては異様なほどに打たれ強い彩樹だつて、その耐久力は無限ではない。レイシアは効果的に攻撃を散らして彩樹にガードを許さず、着実にダメージを蓄積していく。彩樹はもうサンドバッグ状態だ。

「……さ、彩樹先輩っ！」

彩樹の身体がぐらりと傾いた。しかしレイシアはそのまま倒れることを許さず、彩樹の身体を抱えてそのまま背後に反り投げで落とす。レスリングでいうところのフロントスープレックスだが、彩樹自身の体重にレイシアの体重も加え、背中ではなく頭から地面に叩きつけられていた。しかも下はクツシヨンの効いたリングではない。

優雅な動きで立ち上がったレイシアは、勝者の笑みを浮かべていた。

彩樹は地面に仰向けになったままで、ぴくりとも動かない。

「命取りになると、そう言ったでしょう？ 最初から本気を出していれば、それでも試合になったものを……」

レイシアの言葉が途中で途切れた。身体が、びくつと痙攣する。

手を口に当てる。

同時に、口から鮮血が溢れ出した。大量の血を吹き出しながらレイシアが倒れる。顔の周囲の地

面に紅い染みが広がっていった。

「……だから、てめーにや無理だっつーたる？」

ゆっくりと、彩樹が身体を起こす。腫れ上がった顔でにやりと笑った。

「一姫。すぐ魔法でこいつの出血を止める。ほっとくと十分と持たねーぞ」

「え……は、はいっ！」

この光景を呆然と見ていた少女の一人が、慌てて杖を取り出した。やはり彼女は彩樹の知り合いであり、しかも魔術師であるようだ。

「……水冥掌？」

歩美はぼつりとつぶやいた。

名前だけは聞いたことがある、極闘流の門外不出の秘技。

最後に投げられる瞬間、彩樹の掌がレイシアの身体に触れていたのは見えた。それだけのことでこれだけの致命的なダメージを与えられるとなると、他には考えられない。

「彩樹先輩……」

また、涙が出てきた。

* * *

「こうなったら、全員で一斉にかかりなさい！
殺しても構わないわ！」

レディ・マレイアの金切り声が響く。

それを聞いて、彩樹が唇の端を上げた。危険な
笑みを浮かべて、瞳が爛々と輝いている。

「まずい、な」

微かに眉間を寄せてアリアーナがつぶやいた。

早苗も困惑の表情を見せる。彼女も「まずい」の
意味は正確に理解していた。

このままでは危険だ。彩樹ではなくて、彩樹の
相手が。

残った闘奴たちがレディ・マレイアの言葉に
従ったとしたら、今度こそ死人が出る。その死体
はもちろん彩樹ではない。

いくら凄惨なものとはいえ、闘技はあくまでも
「観客に見せるための競技」だ。殺すつもりでや
ることはないし、普通は致命的な怪我を負うよう

な技も避ける。

だからむしろ、「躊躇せずに殺せる」「人体を破
壊できる」という点では彩樹の方が上だ。その気
になれば、蟻を踏み潰すのと同じ感覚で人を殺す
技を使える。よほど親しい者が相手でない限り、
人を殺すこと、傷つけることに対して、彩樹はな
んの抵抗も持っていない。

「……止めますか？」

早苗が訊く。

「一応、殺すなどは言っておいたのだがな」

アリアーナは微かな溜息をついた。いくら言い
聞かせたとしても、相手が殺す気で来た場合に彩
樹が躊躇うとは思えない。

「ずいぶん怪我也負っているようだし、そろそろ
頃合いか。止める。これ以上やると、サイキにも
余裕がなくなってくる」

「余裕が……って、彩樹さんが負けますの？」

アリアーナや早苗ほどには彩樹の『本性』を把
握していない一姫が首を傾げる。アリアーナが微
かに微笑んだように見えた。

「いや、手加減ができなくなってくる」

「つまり、本気で致命傷を与えかねないってこと」

「じゃあ、すぐに彩樹さんを止めませんか……」

「彩ちゃんがああなっちゃったら、相手が全滅するま止めるのは不可能だよ。ここは、向こうに退いてもらわないとね」

早苗はくすつと笑って、ここに来る前にアリアナから受け取ったものを取り出した。

すう……と大きく息を吸い込んで。

「ええーい、静まれ！ 静まれえーい！」

某人気時代劇に登場する某副將軍の付き人のような口調で叫んだ。その手に掲げているものを目にして、レディ・マレイアの表情がさつと強張る。もちろんそれは印籠などではない。マウンマン王国の王に代々受け継がれている、王家の紋章が彫られた魔法の短剣だ。

「ここにおわす御方をどなたと心得る！ 畏れ多くも天下の副……じゃなかった、マウンマン王国を統治する女王、アリアーナ陛下にあらせられる

ぞ！ ええい、控えい！ 頭が高あーい！」

アリアーナは顔を覆っていたヴェールを取ると、頭の上でまとめていた髪を解いた。

彼女の特徴である深い紫の瞳を、真っ直ぐにレディ・マレイアに向ける。

「この顔、まさか見知らぬとは言うまいな？ いろいろと訊きたいことがあるのだが」

貴族ならば、その顔を知らないはずがない。

レディ・マレイアは生気の失せた青白い顔をして、がくがくと震えながら崩れるようにその場に膝をついた。

「……で、この後の台詞はなんだった？」

他の者たちには聞こえない小さな声で、隣に立っている一姫に訊く。

「ええと……『これにて一件落着』です」

台本のページを繰りながら、一姫が答えた。

株式会社MPSは、札幌市豊平区にある小さな人材派遣&紹介会社だ。

そのオフィスに、ある特殊な用途にのみ使用される部外者立ち入り禁止の一室がある。

室内にはなにも置かれていない。ただ、床一面に複雑な魔法陣が描かれているだけ。三人娘たちが、向こうからの帰還の際に使っているものだ。

無人の室内が一瞬、光に包まれる。光が消えると、魔法陣の上には五人の少女の姿があった。

彩樹、アリアーナ、早苗、一姫、そして歩美。

早苗が窓のブラインドを開ける。歩美は窓に張付くようにして外を見た。

その目から、涙がこぼれ落ちる。

「帰ってきた……本当に、帰ってきた……」

涙は後から後から溢れ出て、頬を伝い落ちる。

無言で歩美の背中を見つめていた四人の中で、アリアーナが最初に口を開いた。

「……しかし、このまま帰ってしまうのは惜しい

気もするな」

「え？」

「ぜひとも、わたしの近衛騎士団に欲しい人材だ」

「あ……」

早苗は思わずうなずいた。

現在、マウンマン王国の近衛騎士団は慢性的な人手不足である。若く、見目良い女性で、騎士に相応しい技量を備えている……という条件を満たす者は国中を探してもそう多くはない。いまだに彩樹をボディガード代わりに使っているアリアーナのだから、この世界から近衛騎士をスカウトしたとしても不思議はない。

それまで泣いていた歩美が、ゆっくりと振り返った。なにやら、複雑な表情を浮かべている。

「……近衛騎士つて、その……、マウンマン王国ではエリートなんですよね？」

「無論だ。たとえ平民の出身であっても、貴族と同格の扱いを受ける」

「……それも、いつかな……行っちゃおうか

なあ」

「歩美ちゃん……?」

今にも泣きそうな寂しげな笑みを浮かべて首を傾げると、歩美は彩樹の方を見た。

「彩樹先輩って、しょっちゅう向ここの世界へ行ってるんですよね?」

「ああ、誰かさんの人使いが荒いからな」

ここへ戻ってくるまでの間に、彩樹たちの事情は歩美にも説明してある。

「だったら、このまま向こうへ戻って近衛騎士になっちゃおうかなあ。女王陛下直々にスカウトされるなんて、すごいことですよな?」

「歩美ちゃん?」

驚いたのは早苗と一姫だ。大変な苦勞をして、ようやく半年ぶりに故郷に戻ってきたというのに、いきなりなにを言い出すのだろう。

「どうして? ようやく帰って来れたんじゃないかい」

「だって……さ」

歩美は自分の身体をぎゅっと抱きしめた。涙が

一筋、頬を伝う。

「家に帰って、お父さんやお母さんになんて言えばいいんだろう。こんな……汚れちゃった身体で……」

その後は言葉にならなかった。がらんとした室内に嗚咽が響く。

泣きじゃくる歩美に、相変わらずの笑みを浮かべた彩樹が近付いていった。

「汚れた? どこが?」

目にもとまらぬ早業で、歩美のTシャツを脱がす。

「先刻、風呂にも入ってきたし、綺麗なもんじゃないか」

「そ、そーゆー意味じゃないです! やっ……ああんっ!」

露わになった胸に唇を押しつけられた歩美が身悶える。彩樹の掌が、滑らかな肌の上を滑っていく。

「ほら、こっちだって」

歩美が反応する間もなく、下も脱がしてしまっ

た。こんな時の彩樹の動きは、空手の試合よりもよほど素速い。

「やああつ、そんなとこ広げないでっ！ やああん！ 舐めないでくださあいつ！」

じたばたと暴れる歩美だが、抵抗の甲斐もなく床の上に押し倒されてしまう。彩樹が、非常にきわどい部分に顔を押しつける。

他の三人は「またか」という表情をしていた。

「やつ……あ……あんっ！ あつ、あんっ！」

「あの年増女に犯されたから、家に帰れないって？ そんなこと気にしててどうする。ンなもん、よくあることだぞ」

「え……？」

歩美を身体の下に組み伏せたまま、彩樹が上体を起こした。ほんの一瞬だけ優しい笑みを浮かべて歩美を見たが、またすぐにいつもの皮肉っぽい表情に変わる。親指を立てて早苗を指差した。

「見ろよ。こいつなんかオレにさんざん弄ばれてるけど、毎日能天気な暮らしてるぞ」

「な、なんでここでウチを持ち出すのっ！ それ

だったらいっちゃんだって同じじゃない！」

「……と、ゆーわけだ。同性に犯されるなんて、珍しいことじゃない」

「……珍しくないんですか？」

歩美は身体を起こしながら、確認するように早苗を見る。頬を赤らめながら、早苗は顔の前で手を左右に振った。

「いや、ここだけここだけ」

とはいえ、『彩樹の周囲』に限っていえば珍しい話ではない。というよりも日常茶飯事だ。

「あのね、歩美ちゃん」

早苗は歩美の傍に屈んで、顔を覗き込んだ。

「黙っていればいいと思うよ。「なにも訊かないで」ってね。きつとね、お父さんもお母さんも、温かく迎えてくれると思う」

「でも……」

「どうしても家が居心地悪かったら、オレん家に来ればいいさ。まあ、近衛騎士つてのも悪くはないけどな。向こうに遊びに行く楽しみが増える」

「彩樹先輩……」

目にいつぱいの涙を浮かべて、歩美は彩樹にしがみついた。ただし今度は、口元に笑みがこぼれている。

「……大好き」

「じゃとりあえず、今夜はうちに泊まるってことで」

「ちよおつと待ったあ！」

早苗が慌てて割り込む。なんだかんだいってもこの中では一番の常識人だ。

「とにかくまず、一度家に帰らなきゃ」

「妬いてんのか？」

「誰がっ！」

目の前で繰り広げられる早苗と彩樹の掛け合いに、歩美がぷつと吹きだした。

「彩樹先輩……今日は、家に帰ります。それで、

あの……」

途中まで言いかけたところで、頬がぼつと朱く染まる。俯いて、蚊の鳴くような声で後を続けた。

「……明日、先輩の家に行ってもいいですか？」

その……その時に、今の……ううん、半年前の続

きを……」

「よしよし、お前も大人になったなー」

下心まる出しのいやらしい笑みを浮かべて、彩樹が歩美の頭を撫でる。やきもち妬きの一姫がむくれているが、状況が状況だから文句を言うわけにもいかない。

それまで黙っていたアリアーナが、微かな笑みを浮かべた。

* * *

アリアーナはそのまま向こうに戻り、三人は歩美を家まで送っていった。

「……本当に、ありがとうございました」

玄関の前で、歩美がぴよこんと頭を下げる。

彩樹はその顎に手をかけて上を向かせて、乱暴に唇を重ねた。

「じゃ、また明日な」

「……はい！」

泣き笑いの表情でもう一度頭を下げて、歩美が

家へ入っていく。半年ぶりの、自分の家へ。

それを見届けて、三人はその場から引き上げた。もう夕方、正面で大きな夕陽が山の陰に隠れようとしている。しばらく無言で歩いてから、一姫がぼつりと言った。

「……歩美さん、大丈夫でしょうか？」

「さあ、な。なるようになるさ」

「正直なところ、あまり後味のいい事件じゃないよね」

早苗は小さな溜息をついた。

歩美は無事に家へ帰ってきたが、それで傷が消えるわけではない。

向こうで鬪奴として過ごした辛い半年間は、歴然とした事実なのだ。すぐに、元通りの生活に戻れるはずもない。

それでも。

どんなに大きな傷だつて、生きてさえいれば少しずつ癒えていくものだ。

(……大丈夫だよ。彩ちゃんもいるし)

こんな時、彩樹の存在はある意味救いである。

彩樹と一緒にいると、細かいことで悩むのが馬鹿馬鹿しくなってくるのだ。きっと歩美だつてそう思うことだろう。

「だけど私、歩美さんが少し羨ましいですわ」

一姫が唇を尖らせながら、彩樹の腕に抱きついてくる。

「彩樹さんに、あんなに優しくしてもらって」

ようやく彩樹を独り占めできるとばかりに、しがみついた腕に頬ずりした。彩樹がその肩に手をかける。

「オレはいつだつて優しいだろ。相手が女の子なら誰だつて」

「……本気で言つてるところが怖いなあ」

早苗は肩をすくめた。

普段の彩樹を思い出してみる。あれで「優しい」というのであれば、彩樹の優しさはかなり屈折している。

「彩樹さん。今晚、彩樹さんのところに泊まっていいですか？」

「もちろん。早苗も来るよな？」

「……まあ、どうしても言うんなら行ってもいいけど」

ため息まじりに早苗もうなずく。

ほら。

こうやって、当り前のように堂々と「3P」に誘って来るんだから。

やっぱり屈折している。

でも、本音を言えば。

(……そんなところも、嫌いじゃないけどね)

早苗も一姫を真似て、彩樹の空いている方の腕に抱きついた。

あとがき

お久しぶりです。

すっかり「年に一作」のペースとなってしまうた『たた少』の第四話をお届けします。

しかし……まあ、いいんでしょうかねえ？ この話を一般向けで公開してしまって。これでも最初の案よりはかなりライトになっているんですから、ずいぶんと暗くて重い話です。

実はこれ、元々は『たた少』のエピソードじゃありませんでした。三人娘もアリアーナも出てこなくて、純粹に歩美だけの話。

だけどそうすると、本当に救いようのない重い話になって、しかもエロエロで。で、まあ、もう少しライトにできないものかと考えて、彩樹たちと絡めることにしたんです。

ところで、『たた少』第一話のあとがきを憶えている方はいるでしょうか？

「『光…』が諸々の事情でずいぶんと重い話になってきたので、もっと気楽な話を書きたいと

思ってたできあがったのが『たたかう少女』なのでした」

……なんてふざけたことを言ってたのはどこの誰でしょう？

ええ、忘れてください(笑)。

でも正直な話、二話以降の『たた少』は、キタハラ自身も首を傾げながら書いている作品です。常々「なにか違うよなあ」と思っていたのですが、最近ようやくその理由がわかりました。

『たた少』って『光』と違って「もっと面白くしよう」「もっといい作品にしよう」とか考えずに、ただ書きたいことだけを書いている自己満足的な作品なんですよね。『光』もかなりやりたい放題やりましたけど、それでも「ここでこーゆー展開にすればもっと盛り上がる」「物語としてはここにもう一つなにかエピソードが必要」とか、いろいろとプロットを考えて、より面白いものにしてしまっていたのですが、最近の『たた少』にはそれが無い。特に『スナーク狩り』と『キャツ

ト・ファイト』はそう。

だから、『たた少』はあまりおおっぴらに宣伝しにくい作品です。今回は恒例の「楽園の投票のお願い」もなしにしておきましょう。

でもまあ、たまにはこんなのもいいかな、と思います。これから書く『たた少』以外のシリーズはどれも、ちゃんと「小説として完成度の高い面白いもの」を目指すつもりですから。

ということですので今後の予定。

『たた少』は次回が一応最終話の予定です。とはいえ、全三話の予定だったものが『スナーク狩り』『キャット・ファイト』と当初の構想にないエピソードが入ってきているので、今後のことも保証はできませんが。

それでも一応、今の予定では第五話『反逆の少女たち(仮)』が最終回です。また、いろいろと暗くて重くて痛いシーンがあるかと思えます。『痛快百合的美少女活劇』だったはずなのに……。しかし考えようによっては「痛くて」「気持ちイ

イ」話ですから、タイトルに偽りなしといえるかも(笑)。

第五話は二 二年前半を予定していますが、その前に一本新作を書くつもりです。『光』本編が完結して、『たた少』も終わりが見えてきたので、『月羽根』以来の新シリーズを開始しようかと。

今度こそ、ほんわかほのぼのとした話になるはず。これまでのキタハラ作品のファンを裏切るような作品にはならないと思いますので、どうぞお楽しみに。

二 一年十一月 北原樹恒

kisune@nifty.com

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/>

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。